

---

# 戦国のセイバー

武士道

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦国のセイバー

### 【コード】

N6963V

### 【作者名】

武士道

### 【あらすじ】

戦国の武將に憑依した、主人公が死んだ後に今度はFATEの世界に転生！？して、ハッピーエンドを目指す話。

いきなりセイバー！？（前書き）

こんにちは。 武士道です。

最近、このアイディアが浮かんだので書いてみました。  
よろしくお願いします。

いきなりセイバー!?

「……………どうしてこうなった!?

「ツツツ! 貴様! !どこから現れた! ?」

と俺に剣を振りかざしてくる少女……………

「俺が聞きたいわああああ! !」

俺は愛刀の百鬼兼光ハひゃつきかねみつヱに手をのせて得意の居合の体勢をとって、

「居合い……………五月雨! !」

「なっ! !ぐっ……………できる……………」

「おい、ガキンチョ! 俺には闘う意思はない! 剣を納めてくれ……………」

「ガキンチョとは何ですか! ? 私を馬鹿にするのですか! 「このまま闘って勝てるのか?」……………分かりました。信じましょう……………士郎。この人に害意は無いようです……………」

「そのようだな。なああんたの名前は?」

「俺か?……………伊達政宗だ。よろしく……………」

やべえ……………こいつ、士郎じゃねえか! そういえば、さつき闘った娘もセイバーだし! とつとりあえず、状況を整理しよう! まず……………そうだ。俺死んだだった……………そう、そうして俺は死んだ……………ハズだった……………何故か俺はあの後、目が覚めたら戦国の世に生まれて……………しかも、憑依? した人物が伊達政宗だったんだっけ? そうだ……………そうして、俺は奥州を無事統一して徳川の世になって、そんで俺は病気で静かに死んだ筈だ……………。確か……………その後……………」

「ああ〜こいつ以外に面白かったんだけどなあ〜。そうだ! この世界におくつちやお! まあ……………設定はこんなもんかな……………? ふふふ……………面白くなるぞお〜。」

……………思い出した。誰だよ! あの野郎! 絶対殺す……………」

しかし、設定というのはどういうことだ？俺がそんなことを悩んでいると

「伊達政宗！？それって、あの戦国時代の武将の!？」

「ああ……そうだ。ところで、君達の名前は？」

「ああ……俺の名前は、衛宮 士郎。そして、こいつが「セイバー」です。「らしいです。」

「らしい？」

「ええ……さっき、襲われていたときにこの娘が出てきて俺を助けてくれたんだ……そしたら、あんたが空から落ちてきたんだ……」

「成る程……」

「って事はつまり、今はFATEの一番最初のところか……」

「それで？その娘「セイバー」……セイバーはこれからどうするつもりなんだ？」

「どうって、「私はマスターのサーヴァントです。だから、一緒に住みます。」ええ!？」

「そうか……じゃあ、士郎。俺もついでにいいか？俺、行くとこねえんだよ……」

「……それなら仕方ないな。いいぜ、入ってくれ……「士郎……敵です。」「誰か来ているようだな」えっ？」

「敵を討ってきます。マスター。」

そうして、セイバーは跳んでいった。士郎もあわててついて行った。やれやれ、俺も行くとしますか……俺がつくとそこには、セイバーとアーチャーが闘っていた。……止めるか。そして、俺は二人に向かって走り出した。

いきなりセイバー！？（後書き）

次回はヘラクレス入ります。

ヘラクレス登場！？勝てる訳ねえだろ！！（前書き）

武士道です。

更新大変ですが・・・頑張ります。

ヘラクレス登場！？勝てる訳ねえだろ！！

「それにしても・・・俺、こんな武器もってたか？」

俺が持っていたのは知らないもう一本の謎の日本刀と二丁拳銃だった。・・・なんか、戦国無双の伊達政宗の銃みたいだな。・・・まあいいか。俺は、二人の所へ向かって走っていた。・・・

「はあああああ！」

「くっ！おおおおお！」そこまでだ。・・・二人とも「なっ！？」俺は二人の喉下に刀を突きつけてた。

アーチャー視点

なんだ？こいつは・・・？だが、こいつからは危ない感じがする。うかつに動かない方がいいだろう。

「何者だ？貴様・・・」

「俺か？俺の名は伊達政宗だ・・・よろしくな。」

・・・伊達政宗だと？なぜ、戦国時代の武将がここにいる？こは、パラレルワールドとでもいうのか？

「おい・・・」

「ああ・・・すまん。考え事をしていた。」

「まあいい。とりあえず、戦闘は終了だ・・・土郎の家で話し合いと行こうじゃないか？」

「・・・そうだな。それでいいか？凜？」

「そうしましょ・・・2対1では分が悪いわ・・・」

家のマスターも何とか理解してくれたようだ・・・それより、問題はこいつだな・・・

セイバー視点

この人は、サーヴァント二人相手に気付かれずにここまで来れるとは・・・やはり、只者ではありませんね。出来ることのなら、敵に



なつてほしくないものです。

「おい！聞いてんのか！？お嬢ちゃん！？」

「なつ！？お嬢ちゃんとは何ですか！？私はセイバーと言つたで、とりあえず、士郎の家で話し合おうじゃないか？」って話を聞いてください！」

「ん？ああ・・・すまない。お嬢ちゃん・・・」だから、セイバーと言つたでしょう！」「」

私は思わず剣を振り下ろしてしまった。まずい！

「はあ〜短期だねえ・・・まったく、昔の友を思い出すよ・・・」

「なつ！こつこれは！？」

私が驚いたのは剣が素手でつかまれていたことだ・・・白刃どりですか。よほどの目がないと、出来ない筈ですが・・・なんとという技術・・・

「とりあえず、士郎の家で話し合い！お二方それでよいかな？」

「分かりました・・・」「いいだろう。」

そうして、私達は士郎の家に入ったんです。

ふ〜それにしても何だ？セイバーの剣は見えない筈なのに・・・いや、見えなかったんだけどね？なんとなくそこに来るなつて思つて白刃どりの真似したら、出来ちゃつたんだよな・・・まぐれかな・・・？そんな事を考えながら、俺が横になっていると士郎たちが聖杯戦争の話をしてた。さあて、俺は寝るかな・・・確か、この後はヘラクレスとの戦闘らしいし「ねえ・・・政宗もいくでしょう？・・・ホワイ？今何と？」

「あの〜今なんて？」「だから、政宗も教会にいくでしょ？」「何で？」「だつて、政宗つてサーヴァントでもないんでしょ？」

「そうらしいな・・・」「だつたら、一応説明くらい聞いたほうがいいんじゃない？」「いや、でも俺はいいよ・・・」「いいから！行くの！・・・分かりました。」

そうして、おれは渋々ついていくのであった……はあ、死亡フラグ決定……グッバイ俺

そうして、俺達は教会に着いた。

「さっ行くわよ。」ああ、遠坂……」「やっぱり、俺はいいよ。」いいから、くるの!」

俺は逃げようとしたが、凜に捕まってしまい入ることになった。

「ふむ……それで、君は何なのかね?」

「知らん。気付いたらここにいたのだ。」

「くく。そうか、まさかあの伊達政宗がこんな優男だったとはな……。」

「からかうな……それより早く説明してくれ。」

「よかるう。教えてやるう……。」

まあ……ぶつちやけ知ってるからいいんだけど……そうして、俺は適当に言峰の話聞き流し外に出た……今頃、士郎達が説明を受けている所だろう……

「政宗……はなしがあります。」

「ん?お嬢ちゃんか?」もう、ツッコみませんよ……」「何だ……つまりらんな……で?何だ?セイバー?」

「単刀直入で聞きます。あなたは英雄なのですか?」

「英雄ねえ……。」

確かに俺は地方では英雄?みたいにされたことはあるようなないよ  
うな……

「英雄ではないかなあ……戦乱の世に生まれて人を殺して殺して殺して殺して殺しまくった、人殺しだよ……。」

「そうですね……。」

セイバーはもう何も言っただけで来なかった。そして、士郎達がやってきて俺達は帰った。

「ぐおおおおおおお!」

「ふふっ！こんばんわ。おにいちゃん？」

そうだった・・・ヘラクレスが来るんだった・・・逃げよ！

「ちよっと、何処に行くの！？政宗あんたも戦いなさいよ！」

「俺をあいつらみたいなの戦闘狂と一緒にすんな！俺は、人を動かして闘うことならできるが一人で闘うのは嫌なんだ！」

「いいから・・・闘ってきなさい！」

「頼む！政宗！セイバーを助けてやってくれ！」

「セイバーを？」

俺がそういって、振り向くとセイバーが傷だらけでひざをついていた。本当なら、行きたくない・・・それが、こいつらにとっても俺にとってもいい事だ・・・だけどよお・・・

「見殺しつてのはちと俺の流儀に反するんな・・・助けてやるよ・・・今回だけだぞ！」

そういって、俺はセイバーを助けるために走った。

セイバー視点

「くっ！強い・・・だが、マスターさえ生きてさえいれば・・・

「ぐおおおおお！」ここまでか・・・「おおっと、そこまでだ・・・」「えっ？」

私が入をみると、立派な着物と防具を纏った人がいた・・・

「まさ・・・むね・・・？」

「ぼろぼろだな・・・あっちに行ってる・・・「ちよ！？きゃあ  
ああああ！」」

私は政宗に思い切り投げられた。

「セイバー！大丈夫か!？」

「私は大丈夫です。士郎、それより政宗が・・・」

私は政宗を見ると・・・政宗は腰にさしてる剣に手をかけていた・・・あの構えは？

「ふう〜真面目にやるか！行くぞ！」「ぐおおおおおお！」危な

っ！？五月雨！」

「ぐおおおおおおお！」

「うそっ！バーサーカーが一撃で！？」

「やったか？「ぐおおおおお！」まだいきてるのかよ！」

「ふふふ・・・残念ね。お兄ちゃん、そいつはギリシヤの英雄ヘラクレスなのよ！」

「・・・なっ！？」「・・・」

あいつらはマジで驚いている。しかし、俺は

「へ〜そうなんだ。」

「・・・ずいぶん、反応が薄いよね・・・」

「そりやどうも・・・」

「褒めてないわよ！やっちゃんなさい！バーサーカー！」

「ぐおおおおおおおおお！」

「来いよ！ギリシヤの英雄！歴史好きの俺にしては、興味をそそる戦いだ！」

俺とヘラクレスは刀と斧剣を交えた・・・しかし、あいつには俺の居合いをする暇が無いな・・・だったら！

「はっ！」

「ぐおおおおお！」

俺はもう一本の刀を抜いて、二本でヘラクレスの体を切り裂いた。

しかし、なんだ？この刀の名前を俺は知っている？

「妖刀・・・鬼松・・・？「ぐおおおおおお！」！！二刀叫穿にたてきりちやうせん！」

俺は二本で見えないくらいの斬撃を食らわせた・・・

「・・・仕方ないわね・・・引くわよ・・・バーサーカー！「ぐ

おお！」「お嬢ちゃんの名前は何ていうんだい？」・・・イリヤスフ

イル・アインツベルンよ・・・それじゃあね・・・おにいちゃん

・・・」

そうして、彼女達は消えていった・・・俺は安心して刀を納めた。

・・・

「あんた！闘うの苦手なんじゃ無かったの！？」

「いや・・・俺が闘うとすぐ戦が終わっちゃうからなんだけど・・・」

「化け物ね・・・まあいいわ。衛宮君、私達と同盟を組まない？  
もちろん、政宗も。」

「いいぞ。」

「本当にあなたは決断が早いわね・・・考えているのかないのか・・・  
衛宮君は？」

「まあ・・・政宗が言うなら俺もいいぞ。」

「交渉成立ね・・・それじゃあ、また明日。」

そういつて、凜たちは行ってしまった。さて、俺も士郎の家に帰るか・・・

ヘラクレス登場！？勝てる訳ねえだろ！！（後書き）

ちょっと、オリジナルの話の進め方になりそうです。

## ライダー登場（前書き）

更新頑張ります。

## ライダー登場

翌朝・・・俺は痛感した。衛宮家の食卓は戦だと言う事に・・・。漫画などで知っていたが、これほどとは・・・。セイバーもとい、アルトリアが俺が手をつけようとしたおかずを奪いとってきたので俺も戦を開始した。

「政宗！その卵焼きは私のです！」

「馬鹿野郎！お前は食いすぎだ！見てみる！俺の分の卵焼きがもうねえじゃねえか！？」

「あなたがぼくとしてるのが悪いのです！」

「何だところら！そこを差し引いてもお前の方がくってんじゃねえか！？」

「うるさいです！この眼帯！」

「あつ！それ宣戦布告だよな！そうだよな！？」

「望むところです！」

そうして、俺らがそれぞれ刀と剣に手を置いたところに士郎がフライパンをもって駆け込んできた。

「二人とも！喧嘩はやめてくれ！頼むから！」

「いたしかたななしか・・・」「マスターがいうなら・・・」

「やれやれ・・・」

そんなことをしてる内に何と、腹黒少女の桜ちゃんとタイガーこと藤村大河が入ってきた。

「先輩！遅れてスイマセン！！あれ？誰ですか・・・その人たち？」

「士郎ー！おなか減ったよ」

おいおい・・・桜ちゃんから変なオーラが出てるぞ・・・黒化しそうだ。タイガーは食べることにしか興味が無いのね・・・どっかの王様みたいだな・・・何か。失礼なことを考えていませんでしたか？政宗・・・。」と俺の心を読む王様・・・勘弁してくれ。



「何も・・・思ってたねえよ・・・。」

「そうですね？それならいいのです。」

俺が士郎のほうを見ると俺らのことを説明しているようだ・・・  
一体どんな説明をしているのだろうか？

「ああ、政宗。セイバー。こつちに来てくれ。」

む？ここで、セイバーの事を紹介するんだっけか？俺がこの世界に  
来たことでバランスが崩れたのか？

「何だ？（何でしょう？）」

「藤姉。この人達は親父に世話になった人たちだ。それで、親父に  
恩を返したくてこの家にいるんだよ。」

「ふ〜ん。そうなんだ。お名前は？」

「俺の名前は・・・伊達政宗。政宗と呼んでくれ。」  
「私はセイバ  
ーと呼んでください。」

「分かったわ！政宗さんとセイバーちゃんね！私は藤村大河。よろ  
しくね！」

「私は間桐 桜です。よろしくお願いしますね。政宗さん！セイバ  
ーさん！」

「よろしく。大河。桜。」

それから、俺たちは飯を食い始めた・・・

「行つてきまーす」「」

「おう！行つてらっしや〜い。」

俺がそういうとセイバーが士郎と話をしていた・・・おそらく、  
学校に行くか行かないかというはなしだろう。・・・俺は寝る  
か。

「政宗！」

「うお！？何だ！？」

「ちよつと、話があります。ついてきてください！」

「ああ・・・いいぞ。」

俺はセイバーについてくと、庭の見える部屋に入った。何だ？何か

俺悪いことをしたか？そんなことを俺が考えていると・・・

「政宗・・・あなたは私の敵なのですか・・・？」

「ああ？」

「政宗は私の敵かと聞いているのです・・・」

「お前はどつちがいいんだ？」「えっ？」「俺に敵になって欲しいのか？まあ・・・俺は別にそれでいいぜ？殺す覚悟はあるよ？俺は・・・」

「私は・・・出来ればあなたと戦いたくない・・・何故？」  
「・・・あなたと食事をしていたあの時・・・私は楽しかったです。だから・・・闘いたくない・・・」

「そうか・・・なら闘わないよ・・・」「・・・本当ですか？」「ああ・・・お前・・・裏切られたことがあるんだろ？」「つつつつ！」「大丈夫・・・俺が生きていた時代のなんてそんな事日常茶飯事だったからな・・・」

「過酷な人生だったんですね・・・」「ああ・・・だから俺がお前の友達になってやる。」「えっ？」

「俺は友達は裏切らないぜ？だから、元気出せよ・・・」

「政宗・・・ありがとう。」「

「さあ・・・お前のマスターがピンチだぞ？」

「えっ！？本当だ！？今行きます！マスター」

そうして、セイバーは行ってしまった。さて、俺もメデューサの顔とワカメの顔を拝みにいきますかね・・・俺はセイバーの後を追いかけた。

#### 士郎視点

俺は結界の起点を見つけたまではいいんだがライダーに襲われてしまった。しかも、ライダーの鎖のついた釘のような武器が俺に刺さっている。

「ぐう！」

「ふふ・・・逃がしませんよ？」

「ぐう……こんな物！ぐうううう！」

「ふふっ……勇敢なのですね。ですが、これで最後です！」

「うわああああ！「ガキイン！」えっ？」

「マスター！大丈夫ですか！？」

「セイバー……？？」

そこには、金色の髪に鎧をきた剣士が立っていた。

「ふゝ何とか間に合ったか……」

俺はセイバーの後に続いて降りた。見るとそこには桃色の髪の女が立っていた。

「セイバー……こいつは俺がやる……士郎をつれて離れてい  
る……」

「分かりました……護武運を！」

そういつて、セイバーはすこし離れた。そう、ちょうど俺の声が聞  
こえないくらいに……

「あなたは誰です？」

「俺か？俺は伊達政宗……日本人なら誰もが知っている俺は思  
っている。」

「英雄ですか？」

「残念……英雄ではないな……ただの人殺しだよ……」

「そうですか……あなたには強力な魔力がありますね……「何だ  
と？」気付いてなかったのですか？まあ……いいでしょう。その魔  
力……もらいます！」

ライダーは俺に釘を投げてきた……そして、俺はその釘をつかん  
だ……

「なっ！？」

「馬鹿だなあ……丸見えだぞ？メデューサ？」

「なっ何故私の真名を！？」その話はいい……とりあえず……消  
える！……！」

俺は懐の二丁拳銃に手をかけた……名前なんだっけ？まあ……

適当に阿修羅でいいか・・・

「おらあ!!」「なっ!?!?ぐう・・・」「足に当たったか?・・・まあいい・・・さつさと行け・・・えっ?」「お前をころす気はないよ・・・お前なら片足でもいけるだろ?」

「・・・」

何も言わずライダーはお辞儀だけしていつてしまった。さて・・・問題は・・・!!突然矢が飛んできた・・・来たよ・・・面倒ごとが・・・

「貴様は何者だ・・・?」

「はゝ面倒くせ・・・」「何者だと聞いている!」・・・転生者さ・・・」

「転生者だと・・・?」

「ああ・・・そのことに関しては後でゆっくり話してやる・・・今はそんな事を言っている場合じゃないだろう?」

「何を・・・」「アーチャー!何やってんのよ!?!」・・・どうやらその様だ・・・」

アーチャーはとても残念そうな顔をして凜の元に向かっていった・・・俺もいくか・・・そうして俺は士郎の家に向かった。

## ライダー登場（後書き）

次回は戦闘するか分かりません。  
次回もお楽しみに。

俺の朝はヤバイ……（前書き）

どうも。武士道です。

更新頑張ります。

俺の朝はヤバイ……

一時休戦といった俺とアーチャーは一度別れて士郎の家で待ち合わせをした……そして、士郎の家にて……

「政宗……」

「ん？何だ？セイバー？」

「政宗はその……王だったのですか？」

「王？俺が？ははははは！「何故笑うのです！？」まあ……確かに俺は奥州の竜とも呼ばれたこともあるし、独眼竜という異名もあつたな……結果的に言えば、俺は地方の領主様つてことだ……お前から言うな？」

「あなたほどの男が地方の領主ですか……あなたが私の部下だったら良い国を作れたでしょうね……」

「……流石はアーサー王……考えることが違うな……！！何故私の真名を！？」それは秘密だよ……」

「……まあいいでしょう。政宗はサーヴァントではないのですし……なにより、友達なのですからね……」

「ありがとうよ……おつ？飯が出来たようだな？「政宗は鼻がいのですね？」まあな？それじゃ！お先に！」

「あつ！ずるいですよ！政宗！？」

俺は飯に向かつてダツシュした！台所に行くのと士郎と桜ちゃんが飯を運んでいた……そういうえば……確か桜ちゃんには蟲がいるんだっけ？……かわいそうに。だが、俺には何も出来ない。許しておくれ……そう考えながら俺は席に着くとピンポン！とインターホンがなった。……来たか。ダブルサンタ……「それより、士郎？「何だ政宗？」何で俺の隣にセイバーなんだ？戦争が始まるぞ？」

「しつ仕方ないだろ？セイバーがそこがいつて言うんだから？「何？」」

俺がセイバーを見るとセイバーが顔を赤らめていた……はあ。  
面倒なことになりそうだ。  
そんな事を思っているうちに士郎が困った顔をしながら、凜たちを  
連れてきた。

「今日からここに居候させてもらうわよ？よろしくね？」

「ああどうぞ？」「それがマスターの意思なら」

「ありがとう。私おなかすいちゃった。ご飯にしましょ？」

「ああそうするか？それでは、みなさん手を合わせて」「」「頂  
きます！」「」「」

あれ？俺何時から号令係になったの……？しまった！こんなこ  
とを考えている場合じゃない！

「隙あります！政宗！」

「俺の焼肉がああああ！くそっ！ならばおれはヒラメを頂く！」

「くっ！私のヒラメが……やりますね。政宗……」

「そりやどうも……」

箸を右手に茶碗を左手ににらみ合う二人……戦は始まったば  
かりだ！

#### 凜視点

この人……本当にバーサーカーを倒したあの人なのかしら？ま  
るで、セイバーのお兄さんのようじゃない。でも……楽しそう  
な人ね……

「ねえ……士郎？」

「なっなんだ？遠坂？」

「いつつもあの二人つてああなの？」

「ああ……いつつもあの調子だよ……」

「へえ……」

何か憎めない人ね……はっ！いけない！いけない！この人は  
いつかは敵になるかもしれないのよ。でも……こんな優しい人  
がああ奥州を統一した伊達政宗なんて信じられないわ……私はそ



う思いながら茶をすすった。

その夜……

「いい夜だな？アーチャー？」

「気付いていたのか……」

「気付くに決まってるんだろ？なんとなく気配を感じるから……」

「気配は完全に断ったと思うのだが……化け物かね君は……」

「化け物か……ところであの話をしにきたのだろう？」

「ああ……そうだ。君が何者かをだ……」

「簡単に言うと俺はこの世界の住人ではない。「何だと!？」大きい声を出すな……俺の予測だとこの世界は平行世界だ……お前の知っている世界ではないだろう？」

「平行世界……やはりな。それで、転生者といっていたな？どういうことだ？」

「どういうことって、異世界からの住人って事だ……まあ俺らの世界はお前らが言う神様の世界ということになるかな？」

「何だと!？」

「だから、大きい声をだすなつての。まあおれはそこで死んだんだ。そしたら、気付いたら伊達政宗に憑依してた……そして、武将としても死んだ俺はここについた……つてことだ。」

「成る程……貴様が別世界から来たことは分かった……それで？貴様の目的は何だ？」

「目的ねえ……強いて言うならハッピーエンドかな？「ハッピーエンドだと？」そうだ。俺は大体のことならこの聖杯戦争の行く末やこれからお前らがどうなるかが分かる。」

「ほう？それで？」

「救ってやりたいんだ……あの娘を……土郎をな……そして、アインツベルンも……出来るなら桜もだが……」

「救いか……」「言うておくが……この世界の土郎を殺しても

無駄だと思うぞ？」・・・何故だ？」

「歴史の修正力ってやつさ・・・俺も日本の歴史を変えようとしたことがある。」・・・結果は？」失敗だよ・・・結局歴史通り奥州統一で終わっちまった・・・」

「そうか・・・分かった。だが、約束してくれ・・・」「何をだ？」必ずこの世界の俺たちを幸せにしてくれると・・・」

「分かった・・・約束しよう。」

「助かる・・・それではな・・・明日酒でも飲もう・・・」

そういつてアーチャーは行ってしまった・・・あいつ、あんな奴だっけか？俺は眠い目をこすりながら布団に入った。

翌日・・・セイバー視点

「政宗！起きてください！朝ですよ！」

「頼む・・・あと1分いや・・・後2分」

「駄目です！」「又又又又・・・」「・・・くそ。このままでは・・・はっ！そうだ！・・・いいんですか？政宗？あなたの朝ご飯はありませんよ？」

そういつと政宗は私の手をつかんで・・・

「それだけは許さん・・・」

そういつて、ふらついた足でトイレに行きました・・・もう・・・

・・・食いしん坊ですねえ。政宗は・・・

俺はトイレについて朝の一発を出していた・・・すると、遠坂が寝ぼけているのか普通に俺のところに入ってきた・・・マジかよ！朝からテンション下がるわ・・・死亡フラグ立ちましたね・・・こりゃ。

「ふあく眠い！トイレトイレと・・・きゃああああ！」

「それ！俺の台詞うううううう！」

俺の朝は平和という言葉は存在しないようだ・・・

俺の朝はヤバイ……（後書き）

次回はライダー戦です。  
お楽しみに！

## 主人公の説明（前書き）

どうも。武士道です。

ちよっと、主人公が分かりにくいと思うので説明入れときます。

## 主人公の説明

主人公 伊達政宗（転生者）  
一度死んで、気付くと戦国武将の伊達政宗に憑依していた・・・  
一度、天下を狙うがあえなく失敗し、結局歴史どおり奥州統一のみ  
となった。やがて徳川の世になって病死した、享年70（満68歳）  
。そして、目が覚めると自分は全盛期の20代の頃に若返っており  
異世界にやってきた。

## 武器

百鬼宗近（ひゃくきむねちか） 政宗の愛刀だったもの。

阿修羅（あしゅら） 戦国無双の伊達政宗の二丁拳銃。名前は思いつきで付け  
たもの。

鬼松（おにまつ） 目が覚めると持っていた、謎の妖刀。

## 人物背景

基本は面倒くさがり。しかし、仲間のためなら己の身を削ってでも  
助けに行くという結構優しい人物。楽しいことが大好きで無粋なこ  
とをするやつが嫌い。

日課は刀を研ぐことと、朝からの一発（ご）自由に解釈してください。  
。好きな食べ物（ラーメン）。

趣味は読書や釣りです。

楽しみなことは、日本茶を飲みながら平和を謳歌すること。しかし、  
最近（セイバー）に邪魔（邪魔）をされている。

容姿は戦国バサラの伊達政宗。（転生したら変わっていた・・・）

能力？（注）今の所作者が考えている能力です。

筋力増加 A

幸運 D

気配遮断 C

翻弄 B へ相手を幻覚やスピードで惑わすスキル へ

俊足 C +

騎乗 C

探知 A へ半径300メートルなら気配を消してもいなくても場所  
が分かるスキル へ

宝具?? (注)今の所作者が考えている宝具です。

鬼松 怪しげな妖気?を出して、あらゆるものを切り裂く。なお、  
斬れば斬るほど切れ味があがる。かなり高くなると宝具も切れる(。  
ランクBまで)。鞘にしまつと切れ味は元に戻る。

百鬼宗近 強力な斬撃を飛ばして攻撃する。

阿修羅 無数の弾丸の雨を相手に浴びせる。一発の威力はランクB  
程度です。

療養武妖 へりようぶよう へ 対象の傷や病・・・本人が危険と  
定めたものを治す事が出来る。しかし、本人が死んでしまつと今ま  
で治したものが戻つてしまつ。

こんな所です。 へ B Y 作者 へ

ちなみに主人公はまだ自分にこんな能力や宝具があるのは気付いて  
いません。そこの所ご了承ください。

## 主人公の説明（後書き）

飛竜昇天については、詠唱の言葉を募集します。

自分でも考えますが、よろしくお願いします。

それでは、文章が下手くそですが。次回もお楽しみに。

俺に宝具！？ライダー再び！（前書き）

どうも、武士道です。

下手くそな文章ですが、よろしく願います。



## 俺に宝具！？ライダー再び！

「くそく凜め・・・遠慮なく叩いて来やがって・・・」

あれから、遠坂に何故かタコ殴りにされ飯を食いに行つたところ既にほとんどのおかずは消えていた・・・。そう、セイバーの手によつて・・・

「・・・俺のおかずが・・・」

「残念でしたね・・・政宗？既におかずは私の異の中ですよ。」

「昼食のとき覚えてるよ・・・？」「ふふ・・・楽しみにしています。」・・・畜生。」

俺はちよつと残念な顔をしながら、飯をとつた。すると、士郎が・

「なあ？政宗？「何だ？」政宗は知っているのか？「何を？」学校に張っている結界の事だ。」

「ああ・・・あれか。「知つてたのか！？」ああ知つてたよ。」

「何でそのまま見ているんだ！？」

「何でつて俺がいつてどうする？」「何だど？」「仮に俺が行つたとしても・・・だが俺には結界を壊す力はない。そんな奴が行つてどうする？」

「ぐう・・・」

「士郎・・・お前の気持ちも分かる・・・人を救いたい気持ちも・・・だがな？人には出来る事と出来ない事がある。そこを見極めないかぎり、お前は本当の意味で人を救えない・・・」

「・・・」

士郎はそれから何も言わなかつた。セイバーたちもまるで、何かを学んだかのようにだつた。それから、俺達は士郎達を見送り茶をすつていた。

「・・・政宗。」

「・・・何だ？」

「士郎達は大丈夫でしょうか・・・？」

「大丈夫だろ？何か異常があったら、俺が気付くし・・・」

「それもそうですね・・・政宗？「何だよ？」稽古しませんか？」

「はぁ・・・？」

「だから、稽古ですよ！稽古！」

「ええ〜面倒くさいなあ・・・」「やりましょう！」・・・分かったよ

セイバーの異常なやる気に俺もハイとしか言えなかった・・・。

「それでは行きますよ！」

「おお・・・来い・・・」

俺は道場に入りセイバーと稽古を開始した。それから、小一時間稽古をした。

「はぁ・・・腹減ったな・・・」

「そうですね・・・ぜえ・・・ぜえ・・・「ん？どうした？」流

石は・・・武士でしょうか・・・強いですね？政宗？」

「ああ・・・伊達に戦国生きてねえぞ？それより、飯にしよう。」

「そうですね！ご飯にしましょう！」

俺らは士郎が作っておいてくれた飯を食べに行くために居間に向かった。

「それじゃあ・・・いただきます。」

「いただきます。」

俺らがそういつて箸に手をつけた瞬間・・・とんでもない力を学校から感じた。

「！！！！」「どうしたのですか？政宗？」・・・学校の結界が発動した・・・」

「・・・随分間が悪いんですね・・・」「同感だ・・・」

・・・行きますでしょうか？」

「ああ・・・そうしよう・・・」

俺らはすぐに甲冑をきてダッシュで学校に向かった。走っている途中に俺は・・・「ワカメめ・・・半殺し決定だな・・・」とつ

ぶやいた。

「政宗・・・？「ああ気にしないでくれ」そうですか？早く行きましよう！マスターが心配です。」

「ああ・・・そうだな。」

俺らは鬼のようなオーラを出しながら学校へ向かった・・・。

ワカメ視点

「ははは！人がばたばた倒れていくぞ！？」「慎二い！」ん？衛宮じゃないか？ちよūdいいや・・・ライダー手を出すなよ？「分かりました」死ね！衛宮！」

僕は士郎に向かって疑臣の書で攻撃をした・・・だが、士郎がもっていた木刀によって防がれてしまった・・・

「ただの木刀に防がれただと！？何をした！衛宮！」

「俺も実は魔術が使えるんだよ・・・」「何だと・・・？」「まあ・・・強化っていう地味な魔術だけだな？」

「ふっふぎけるなあああ！何でお前が魔術が使えるんだ！？偶然魔術回路が発現したひよっこのくせに！殺してやる・・・殺してやる！」

僕は士郎に向かって疑臣の書で攻撃をした・・・しかし、その一撃はいきなりでてきた男によって止められてしまった。

「この・・・くそワカメ・・・」「なっなんだよ！？お前！？」俺の昼飯の邪魔をしゃがって・・・」

俺は偉そうにしているワカメを殴りに走った・・・

「うわあ！くるな！来るなああああ！」

「何だ？そのへっぽこ魔術は？」

俺はワカメが出してくる魔術？を片手で弾いた・・・そうして、ワカメに殴ろうとした所ライダーに邪魔をされた・・・

「ライダーか・・・」

「久しぶりですね・・・」

「よくそんなのをマスターにしているな？」

「……それが……あの娘の指示か?! あなたは何故それを……?」

「そんなことはどうでもいい……逃げるか？」

「さあ……? どうでしょうね!？」

「!! おっと。」

ライダーの武器をかわした俺……そして、凜たちがやってきてアーチャーが攻撃を仕掛けたそろそろ危ないな……お? ライダーが目隠しをとったな……来るか?

「!! これは……」 「魔眼よ! しかも強力な!」

あいつらは魔眼に苦戦しているようだな……さて、そろそろ……おっ? 来たか……俺が見るとライダーの前に血の魔方陣が出来上がっていた……

「士郎! 危ない!」

セイバーやアーチャーがマスターをかばう……その前に俺は走った……。

「政宗!? 何を……」

「黙ってみてろ! ……行くぞ! 阿修羅!」

俺は阿修羅に手をかけた……すると、どうつかえばいいか頭に流れ込んできた……成る程これが設定という奴か……これが、宝具とはな……俺はそう思いながら阿修羅で弾幕を作り上げた……

「阿修羅……千剣弾雨へせんけんだんう!」

「これは……!!」

俺の宝具とライダーの宝具がぶつかった……どうやら、相殺したようだ……しかし、ライダーの姿はもう無かった……士郎達は何かを話し合っているようだ……そして、二手に分かれた……

「政宗……何だ?」俺は慎二を助けに行く……

「そうか……行って来い。」えっ? 「何だ? 俺が止めると思っ

たのか？お前が決めた道なら俺は止めん」

「ありがとう・・・政宗・・・それじゃあ行くかうか？」

「・・・待て俺も行くのか・・・？」

「当たり前でしょう？私たちは友達なのでしょう？」

「友達関係なくね？」

俺はそんな事を考えながらもセイバーたちについていくのであった。

**俺に宝具！？ライダー再び！（後書き）**

次回でライダー戦は終了です。

オリジナルの話の展開になりそうです。

その所をご了承ください。

ライダー戦決着・・・俺桜を救えました・・・(前書き)

こんにちは。武士道です。

更新頑張ります。

ライダー戦決着・・・俺桜を救えました・・・

「はあく何で俺まで・・・」「文句許しませんよ?」・・・はあ。

「俺は今、何故か士郎達と共にライダー達を探している・・・ぶつちやけ、俺の探知を使えば1発なんだが・・・これ集中して探すと結構疲れるんだよな・・・それに、これは士郎達がやらねえと意味ないし。そこで、俺は士郎達にある提案をした。」

「二手に分かれよう」「はっ?」「・・・だから、二手に分かれて探すんだよ!」

「まあ・・・確かにそうだな・・・」

「政宗?」「何だよ?」あなたの探知能力を使えばよいのでは?」

「・・・あれ、疲れるからヤダ・・・」「ヤダってあなたは子供ですか!?」

「うるせえ!あれ、集中すると結構神経削るんだぞ!?」

「・・・分かりました。では、士郎と私はこちらを・・・政宗はあつちを頼みます。」

「おう!分かった!見つけたら銃を空に向けて撃つからよ」

「分かりました。それではご武運を・・・」

「そういつて、セイバーたちは行ってしまった・・・さて、俺も探すとしますか!」

セイバー士郎視点

「まったく・・・政宗は・・・本当に面倒くさがりなのですから・・・」

「まあまあ・・・セイバーも落ち着いてくれよ?政宗も何か作戦があるからあんな事を行ったんだと思うぞ?」

「士郎はそう思いますか・・・?」

「・・・ありえないな。」



「……」  
しばらくの沈黙……

「……とりあえずライダーを探そうか？」

「そっそうですね！さあ！士郎行きましょう！」

「おっおう……」

二人はライダーを探しに走った……

「……そういえば、あいつらが見つけたときどうやって俺に知らせるんだ？」

俺は途中でブックオ で買い物をしたついでに、そんな事を考えていたら夜になっていた……

「……もうすっかり夜じゃん！……良い子は寝る時間だぞ？まったく……」

そんな事を愚痴りながら俺が夜の街を歩いていると……でかいビルに着いた。

「あれ……？このビルってもしかして……」「ガキイン！……」  
「……やっぱりかよ。」

そう……このビルはFATEの漫画でライダーとセイバーが戦った……あのビルだ……俺はなるべく関わりたくないの、一般人のフリをして通り過ぎ去ろうとしたところ……

「ドゴオン！」

「……ごぶっ！何故……こうなる……？」

そう……何故か逃げようとした所、空からセイバーが落ちてきたのだ……俺が何をした？

「だっ大丈夫ですか！？つて政宗！一体今まで何をしていたのです！？」

「探してたんだよ！ライダーの事を！」

「それでは何なのです？……その袋？」

……マズイ。非常にマズイ。今まで、ブックオ に行ってたなんていえない……ばれてはいけない……

「そつそんな事よりライダーが行っちゃったぞ！」

「えっ!？」

ちようど、ライダーが走って屋上に向かっていった……ナイ  
スだ!ライダー!

「くっ!早く追いますよ!? 政宗!「まあ……待て。」えっ!?  
ちよ!？」

「行ってこいやあああ!」

「きゃあああああ!」

俺はセイバーを力いっぱい投げた……おー屋上まで届いち  
まった。すごいな……今の俺の腕力……俺は飛んでいくセイ  
バーを見ながら一人で納得するのであった……

セイバー視点

「きゃあああああ!あつ……土郎。」

私が政宗に投げ飛ばされて屋上につくと、ライダーが宝具を出そう  
としていた……

「セイバー!？」

「土郎!くっ……」

ライダーの放つ光は空に向かってそして……

「まさか……ペガサス!?あれが宝具なのか!？」

「土郎!あれは恐らくライダーとしての彼女の能力の具現です!宝  
具は別にある筈です!」

「ふふふ……流石はセイバーそのとおりです。見せてあげましょ  
う!我が宝具……ベルレフォン!」

!!!物凄い圧力……先程の攻撃とはぜんぜん違う!こうなっ  
たら、私も宝具を……

「いけっ!セイバー!!!何を言うのですか!?土郎!」これ以上  
俺を庇う必要はない!お前はライダーを倒す事だけを考えろ!」

……土郎。あなたという人は何処まで……でも、そんなあ  
なただから私は……

「いいえ。士郎。あなたがその身を犠牲にする必要はありません。  
「なつ何だ!?この風は?」私の全身全霊を持って必ずライダーを  
倒します!」

「猛ろ!天馬よ!天上の神々に愛された美しきわが子よ!その大い  
なる力を持つて眼前の敵を討ち滅ぼすのです!」

ライダーはすごい勢いで突っ込んでくる……

「ライダーよ。貴女の宝具に私も宝具で応えましょう!私はこの一  
閃で進むべき道を切り開く!ゆくぞ!エクスカリバー!」

私の剣から、黄金の光が飛び出してライダーに向かった。

「何!?」おおおおお!」まさか……この子が敗れるとは……  
……

そして、ライダーは消えた……

「うわ……セイバーめ……エクスカリバー撃ちやがったな  
?」

俺は空を見上げて呟く……すると……空から……何か落ち  
てきた……ん?何だ?ありや?瞬間嫌な感じがしたので逃げよ  
うとする俺……しかし、逃げられなかった。

「ドゴオン!」

「ゴはっ!……こんな事さつきもあつたような……たく……誰  
だ?ってライダーかよ!」

俺の背中にはライダーが乗っていた……あれ?待てよ……確  
か漫画では……ライダーが慎二を助けるんじゃないか?やは  
り、俺がいるせいで時間軸が狂ったのか?

「おつといけねえ……それより、こいつをどうするかだな……  
ん?」

俺が困っていると頭の中に情報が流れ込んできた……療養武妖  
?まあいい……使わせてもらおうか!

「……行くぞ。療養武妖……」

俺がそう言って手を当てるとライダーの傷が治った……早いな……

・予想外だぞ。これほど早いとは・・・俺はとりあえずライダーを背負ったまま空を見るとちょうど、ワカメが落ちてきたのでついでに助けた・・・

「ワカメも気絶しているのか・・・まあいいか「政宗さん?」・・・桜ちゃんか」

俺が二人を介抱していると桜ちゃんがやってきた。

「これはどういうことなんです?」

「・・・桜ちゃん?「何です?」 蟲・・・取ってあげようか?」

「!!!本当ですか!?「ああ・・・出来ると思う。」・・・よかった。」

俺は桜ちゃんにも療養武妖をかけた・・・ちなみにこの療養武妖、本人が危険と定めたものを治す力である。

「・・・嘘。本当に治った・・・?「はい・・・おしまい。」 ありがとうございます!」

「いいんだよ。それより、桜ちゃん?「はい?」 聖杯戦争の事何だけど・・・」

「・・・やっぱり知っているんですね。「ああ知っているよ。そこで同盟を組まないかい?」 同盟?」

「そう・・・俺達と同盟を・・・「はっはい!喜んで!」 おっおう ありがとう。」

「あの・・・政宗さん?「ん?何だ?」 本当にありがとうございました。」

「いいよ。お礼なんて。とりあえず、俺は慎二を病院に届けるから桜ちゃんはライダーが起きたら士郎の家に行つててくれ」

「分かりました。」

そうして、俺は桜ちゃんと別れてワカメを病院に投げて・・・士郎の家に向かった。む?そういえば・・・アーチャーとの約束は・・・まあいいか。士郎の家に行けばあいつも着ているだろう・・・俺はそう願いつつ士郎の家へと急いだ・・・

ライダー戦決着・・・俺桜を救えました・・・（後書き）

今回はアーチャーとの酒飲み会話です。

ギャグは苦手だけど更新頑張ります。

それと、長い線が書けなくてすいません。

エクスカリバーの所がかっこ悪くなってしまいました・・・

楽しい帰り道・・・？（前書き）

どうも、武士道です。

更新頑張ります。

（注）主人公はバゼットの事はうる覚えです。それと、時間軸が狂っているのでその所を踏まえてご覧ください・・・

楽しい帰り道・・・？

俺は帰る途中、見覚えのある教会を見かけた。俺はちよつと興味本位で見ると・・・ピンクの髪をしてスーツを着た女の人がいた。しかも、腕から血を流してる

「！！おい！大丈夫か？あなた！？」

「うっ・・・」

・・・あれ？こいつどこかで見た事があるな？それにしても、・・・マズイな。かなりの出血量だ・・・放っておいたら死ぬだろう。

「せめて元の腕があれば、再生は簡単なんだが・・・おっ？」

俺が足元を見ると・・・この女性の腕と思われるものが落ちていた・・・ラッキー。

「よしっ！これなら・・・」

俺は早速、療養武妖を開始した・・・すると、女性の腕はすぐにくつついた。俺は女性に向かって声をかけた。

「おいっ！あなた！」

「・・・」

「意識は無いか・・・仕方ない、土郎の家に運ぶか。」  
俺は女性をおんぶして、足に力を入れたその時

「おい！てめえ！」

「ん？ランサーか？」

「お前、俺の事を知ってるのか？」

「ん？ああちよつと、お前の知り合いに教えてもらったんだよ」

「！！てめえ・・・聖杯戦争の関係者か？」

「そうだが？それで、お前の用事は何だ？ランサー」

「そいつを置いて、とつと失せろ！」

「これは、意外だな・・・てつきり、俺と闘いたいと言うかと思っ

「だが……」

「確かに、闘いてえが……今はそいつの方が重要でね……」

「……俺はランサーを誤解していたようだ。ただの戦闘狂かと思っただが、意外に優しいところあるじゃないか。」

「無理だな」

「ならば……」

ランサーは槍を構えて、臨戦態勢をとった。

「なら聞くが、お前にこの人を救えるのか？」

「ぐっ……」

「安心しろ……助けてやる。」

「……いいだろう。だが、そいつに手を出したら……しねえよ。」

「少しは手を出せよ！男だろうが!？」

「はあ？お前どつちなんだよ？手を出すなって言ったり、手を出せと言ったり、俺にはお前が良く分からん……」

「……もういい。さっさと行け」

「おう！それじゃあな」

と俺が足に力を入れたところ……

「おい。「何だ」約束しろ。」

「何をだ？俺と勝負してくれよ。お前中々強そうだしな……はあ、分かった。」

「それじゃあな」

ランサーは言いたい事だけ言って、どこかに行ってしまった。あの野郎……つとその前に急がなねえとな……俺は速度を上げて土郎の家に向かった。

土郎視点

「それにしても、土郎？「何だ？セイバー」政宗は何処に行ったのでしょうね？」

「そうだな……しかしセイバー「何です？」俺はそれより、気になっていることがある」



「それは？「何で桜が家にいるんだ！？」ああそれは、政宗に呼ばれたらしいですよ？」

「政宗に？桜、どういうことだ？」

「はい、実は……」

それから、桜の話の話を聞くと驚く事がたくさんあったが……何より驚いたのは桜がマスターだったという事だ。それを聞いて、ライダーがいる事を知ったセイバーが襲いそうになったので、それを止めるのにも苦労した……政宗！早く帰ってきてくれ！

『ガラ……』

！政宗！？俺が玄関に迎えに行くと知らない女の人をおんぶしている、政宗がいてそれを凝視しているセイバーと桜がいた……

「ただいま」。うわっ！？」

俺が帰ってくるのと、セイバーと桜にすごい視線で見られた……俺が何かしたのか？

「政宗（政宗さん？）」「なっ何だ？」

「そのおんぶしている女性は誰なのですか？（誰なんです？）」「何故かセイバーたちから、黒いオーラが見える……土郎に俺が助けを求めると、土郎は既にいなかった。

裏切り者おおおおお！と嘆く俺を無視して、セイバーたちは俺に強烈な拳を放ってきた。

「ほお……それで、その女性を助けたと……」

「嘘は良くないですよ？政宗さん？」

「嘘じゃないって！本気だから！信じてくれよ！？」

俺がそれでも説得をすると、二人も何とか信じてくれた……俺ってそんなに信用ねえかな？と考えているうちに土郎が

「それで政宗、その人どうするんだ？」

「どうするって……俺が看病するよ。」

「そうか、分かった。空いてる部屋があるからそこを使ってくれ  
「ありがとよ。士郎」

俺が士郎に礼を言つて、部屋に運ぼうとしたその時、  
「政宗さん？「なつ何だ？「話は何時するんですか？」

「こいつを寝かせたらすぐ来るよ」

「分かりました」

俺が桜との会話を終え、部屋に女性を置くと声が聞こえた

「政宗え……酒は？」

「……」

俺はその声を無視して、士郎達のいる部屋へ急いだ。

「すまん……待ったか？」

「まったく」

「全然」

何故かセイバーたちの反応がきつい……何故だ？

「何でそんなに怒ってんだよ？」

「怒ってなどいません！（ないです！）」

……怒ってんじゃない。俺はそう思いつつ士郎に、

「なあ……何だ？」何であいつらあんなに怒ってんの？」

「俺にも分からないよ……」

「俺、マジでこええんだけど？」

「……頑張ってくれ」

「俺を見捨てるなよ！なあ！」「政宗！（さん！）」「はっはい！  
？」

「何で帰ってくるのに十分もかかるのですか？」

「私もそれが気になっていました……」

すごいオーラをだしてくる二人……泣いていい？

「ただ、部屋に寝かせただけだが？」

「……」

二人は変な目で俺を見てくる……

「何だよ？」

「まさか・・・あの人に変な事を・・・？」

「！！そっそれは、政宗！本当ですか！？」

「・・・政宗。」

「どうやら、俺はとんでもない勘違いをされているらしい。」

それにしても、士郎のが一番効いた・・・俺のHPは既に限界だぞ？

「「どうなんです？政宗？（さん？）」「」

「そんな事する訳ないだろ！？それより、早く話をさせてくれ！」

俺はこの後、またまたセイバー達に殴られた・・・何もしていないのに。

その頃の士郎の家の屋根では・・・アーチャー視点

「せっかく酒も持ってきたと言うのに・・・凜にもやつとで許してもらえてきたのに・・・なにをしているのだ！あいつは！！」

私が居間を覗くと・・・何故かセイバー達にリンチを受けている政宗がいた。

「・・・すまない。政宗、私が悪かった・・・酒を飲むのは明日にしよう。その方が君にとっても幸せだ・・・」

途中、政宗が私のほうを見ながら助けを求めていたが私はそれを無視して凜の元へ帰った。

楽しい帰り道・・・？（後書き）

すいません。酒飲み会話延期にしまして、次回は必ずやります。  
主人公はバゼットの事を忘れていた設定です。  
主人公の固有結界の詩？を募集中です！  
ご協力お願いします。

俺は今、平和がほしい！！（前書き）

こんにちは、武士道です。

主人公の固有結界どこで使うか迷ってます。  
それでは、始まります。

俺は今、平和がほしい！！

『政宗……覚悟してください？』

『政宗さん？歯を食いしばってくださいね？』

『待て！セイバー！桜ちゃん！誤解だ！俺はあの人に变な事なんて……っというか桜ちゃん？その手に持っているのは何かな？』

桜ちゃんの手にあるものとは、鉄球である……しかも、棘のついた。

どこかのRPGに出てきそうな武器である。

こんなんで殴られたら……俺は殴られたときの事を思うとゾツとした。

『政宗……すまない。』

士郎は俺を見捨てた、ああ神よ……呪います。

『政宗ええええええ！』

『政宗さああああん！？』

『やつやめてええええええ！』

俺は盛大に二人の攻撃をモロに喰らった……

『一体、俺が何をした……ぐふっ！』

俺は、視界が真っ赤に染まった……俺は意識を失った。

「はっ！……夢か。」

「おお政宗起きたか？心配したんだぞ？あの後起きないから」  
「あの後って、あれは現実だったのか……」

士郎の話だと俺は昨日の夜、セイバー達にぼこられてそのまま気絶してしまっただろう。

桜ちゃんはライダーが目を覚ますと家に帰ってしまったようだ。

俺が寝かせた女性はと言うと、まだ目が覚めていないらしい。

「そうか、まだ目が覚めていないのか。」

「ああまだ眠っているよ」

「ん？そういえば士郎？飯はまだか？」

「ああもうすぐ出来るよ」

「そうか、じゃあ俺はいつもの一発を出してくるわ」

「お前、その一発って言い方やめるよな」

「悪いな、これはくせでね。」

俺はそういつて新聞を持って、トイレに向かった。

「ふんふんふーん。『ガラ！』……何でだ」

「まっ政宗！？なっ何をしているのです！はっ早く閉めて」

「お前が鍵を閉めてないのがいけねえんだろ？」

そう……あの時あんな事さえ言わなければ……

俺は戦わなくてすんだんだ！

「うわああああ！」

「おっ落ち着け！セイバー！？」

「死ねえええええ！」

「ぎゃあああああ！？」

俺は、飛んでくるエクスカリバーをかわし居間へ急いだ。

「おお政宗。朝御飯は出来てるぞ？」

「ありがとう！士郎！」

俺は速攻で朝飯を食べ、そして

「士郎……何だ？」後は頼む！」

「ちよつちよつと待て！どついうことだ！？」

俺はそついい残して外へ逃げた。

士郎視点

まつたく、政宗の奴なんだつたんだ？

朝飯も速攻で食べて行つたし、何かあつたのか？

俺は食器を片付けていると

「士郎……なつ何だ？セイバー？」政宗を知りませんか？」

体から赤いオーラが出ているセイバーがいた……

政宗、一体お前何したんだ？

だが、政宗の事だ……おそらく不可抗力だろう。

「政宗？さあ知らないなあ……？」

「士郎……はい！」嘘は良くないですよ？」

「分かりました……」

俺はセイバーが怖すぎて正直に喋ってしまった。

……すまん。政宗



「ん？今なんか、変な感じが」

俺は今、寺に入る石の階段を上っている。  
寺に入って座禅でも組もうと思ったからである。  
それに、セイバーが怖すぎて家に帰れない。  
俺が、そう思いながら階段を上っていると

「そこに行くのはサーヴァントか・・・？どうだ、我と手合わせしてみんか？」

「はあ？」

俺が声のするほうを見ると、そこには着物を来た伝説の侍が立っていた。

俺は今、平和がほしい！！（後書き）

今回はキャスター戦とアサシン戦です。

ちなみにヒロインは

セイバー

桜

キャスター

バゼット？

凜、ライダー、イリヤは入れない予定です。

どれがいいですか？

## 主人公補正（改変）（前書き）

どうも武士道です。

ちよつと書いてて主人公強すぎじゃね？と思ったので  
ちよつと弱体化させました。

## 主人公補正（改変）

主人公 伊達政宗へ転生者へ

### 武器

百鬼宗近 ひゃっきむねちか 政宗の愛刀だったもの。

阿修羅 あしゅら 戦国無双の伊達政宗の二丁拳銃。名前は思いつきで付けたもの。

鬼松 おにまつ 目が覚めると持っていた、謎の妖刀。

能力？（注）今の所作者が考えている能力です。

筋力増加 A

幸運 D

気配遮断 C

俊足 C +

騎乗 C

魔力 C

対魔力 B +

探知 A へ半径300メートルなら気配を消してもいなくても場所  
が分かるスキルへ

宝具？？（注）今の所作者が考えている物です。

百鬼宗近 斬撃を波状にして飛ばす

鬼松 斬れば斬るほど切れ味が上がる。刀に宿るオーラ？で攻撃する。

阿修羅 無数の弾丸の雨を相手に浴びせる。一発の威力はランクB程度です。弾丸は政宗の魔力を打ち出している。

療養武妖へりようぶようぶ対象の傷や病・・・本人が危険と定めたものを治す事が出来る。しかし、本人が死んでしまうと今まで治したものが戻ってしまふ。ちなみに本人には効きません。

宝具は念じると手元に出ます。阿修羅は常時携帯しています。  
政宗戦闘スタイル

基本は一刀流です。すこし、ヤバイなと感じると二刀流になります。

少し、距離が離れていると阿修羅を使って攻撃します。

よく使う宝具は阿修羅。

このくらいです。

それでは、また次回！

出たよ・・・燕返し(前書き)

更新遅れてすいません。

武士道です。

これからもよろしく。

出たよ……燕返し

「はあ？」

俺が階段の上を見上げると立派な長刀を持った男が立っていた。というより佐々木小次郎である。

「俺はサーヴァントじゃねえぞ」

「左様か、しかしそなた強そうだな？どうだ、我と手合わせしてみんか？」

要するに俺と殺し合いがしたいと言っている様な物か……

俺はあんまり戦いたくないし、この世界を狂わしたくないんだけどなあ

ん？そういうえば、こいつセイバーと闘ったのか？聞いてみよう

「いいだろう、闘ってやる」

「話が早くて助かる。それでは早速……」

「ただし条件がある」

「何だ？」

「質問に答えてほしい」

「言ってみろ」

「セイバーとは闘ったか？」

「セイバーのサーヴァントと？いや会ってもないが」

やはりこの世界の流れが狂っているな……

俺というイレギュラーが入っているせいかな。

まあそのことは後で考えよう、とりあえず今は……こいつだな。

「そうか。変な事を聞いてすまない、それじゃ始めようか？」

俺は愛刀の百鬼宗近に手をかけて構えた。  
小次郎もそれを見て長刀を構えた。

「お主は居合いを使うのか」

「そつだ、何か悪いか？」

「いや、何でもない。自己紹介が遅れたな、我は佐々木小次郎」

「俺の名は伊達政宗」

「ほう・・・独眼竜か」

「知ってもらえてて光栄だよ、伝説の侍」

俺らにはらみ合ったままタイミングを計った。

そして・・・

「いざ！」

「尋常に！」

「勝負！」

同時に斬りかかった。

最初は俺がけん制の居合い：薪草を放っていた・・・小次郎は反撃する暇もなく押されているように見えたが、そうではなかった。

俺は、小次郎を壁のところまで追い詰めた。

これで止めだと思ったその時、小次郎はあの構えをとっていた。

「秘剣

燕返し！」

「しまっ！！ぐう！」

俺は燕返し of 三太刀の中の二つは居合いで防いだが、最後の一太刀が俺の左腕に当たった。



腕が取れなかつただけでも幸運だが、かなりの重傷である。  
俺は血だらけの左腕を押さえながら距離をとった。

「ほう……我が燕返しの一太刀を防ぐとは中々やるな」  
「くっ……」

マズいな……今の状態で斬りかかってこられてらやられる。  
療養武妖も自分には使えないし、どうする？

「では行くぞ！」

小次郎は長刀『物干し竿』を構えて向かってきた。  
俺は仕方なく片手で阿修羅を一丁抜いた。

「阿修羅

剣林弾雨！」

「何だと!?!くっ」

俺は阿修羅で弾幕を張った。

しかし、一丁だけなので数が半分である。

小次郎は不意を突かれたのかもろに喰らった。  
これであいつは死なないまでも動けない筈だ。

「何とか……勝てたか？」

俺が安堵して腰をおろすと小次郎がひざをついていた。

どうやら、直前で燕返しを放ち防いだようだ。しかし、すべてを弾  
き返す事は出来なかつたようだ  
体の数箇所から血が垂れている。

「どうやら……この勝負、痛み分けと言う事になるかな？」

「そうらしいな」

「お主、ここに何のようであつたのだ？」

「ただ、座禅を組みに来たんだよ」

「そうか、それは申し訳ないことをしたな」

小次郎は満ち足りた顔をしていた。

本当にこいつがあつた佐々木小次郎なのだろうか？

本物ではないとしてもこいつとは仲良く出来そうだ。

「それじゃあ、俺は行くよ」

「何処にだ？」

「アホか！病院に決まつてんだろ！？」

「そうか、また手合わせしてくれるか？」

「ああ何時でもしてやるよ。真剣じゃなければな」

「分かつた。さつさと行け」

「その前に」

俺は小次郎に療養武妖をかけて、傷を治した。

小次郎は俺の力に驚いて、本当にサーヴァントではないのか？と聞いてきたが俺は血がやばいため無視して病院へと急いだ。

そう……あの腹ペコ王が近づいている事も知らずに……

出たよ・・・燕返し（後書き）

出来るだけ原作に近づけるように頑張ります。

少しオリジナル展開が入ってしまいましたが、ご了承ください。  
次回こそキャスト―戦書くぞ〜！

俺、何か悪い事しましたか………？（前書き）

武士道です。

不定期更新ですいません

俺、何か悪い事しましたか………？

「お大事に」

「どうも」

俺は病院での治療が終わり自分の手を見た。

「これじゃあ、激しい戦闘は無理だな」

包帯を巻き肩からぶら下がっている腕を見ながら俺は呟いた。  
せいぜい、相手の攻撃を凌ぐのが限界だろう。  
俺は士郎の家に帰るため出発しようとした。

「………政宗」

「………」

俺はその冷たい声に黙っていた。

振り向くとそこにはあの腹ペコ王がいた。

「せ、セイバー？何でここに……」

「なんとなくこっちのような気がしたのです。それより、何です？  
その怪我？」

「ああ、少しサーヴァントと戦ってな」

「……！！ サーヴァント！？ならば、今から倒しに  
」

「やめとけ」

俺は小次郎の下に行こうとするセイバーを止めた。

セイバーは俺の意見に反論してきたが説得した所、澁々了解してく

れた。

「それより、政宗？」

「な、何だ？セイバー」

士郎の家に向かっていている途中、セイバーは俺の右肩を強く握り締めてきた。

「あの・・・セイバーさん？痛いんですけど・・・」

「まさか、朝の事を忘れてなんていないですよ？政宗？」

「いや・・・俺、怪我人よ？満足に動けねえよ？」

「関係ありませんよ」

フフフ

「ちょ・・・何、その笑み！？ま、待つて・・・ぎゃあああああああああ！！」

#### 士郎視点

俺は夕食を作るため台所で桜と一緒に料理を作っていた。  
すると

ガララ

「お？帰ってきたか？」

玄関が開いた音がしたので俺は向かいに行った。

そこには、顔に痣が出来ている政宗と顔を満足したような顔をしているセイバーがいた。

「ど、どうしたんだ？政宗？」  
「・・・ノーコメントで」

政宗は疲れたのか無言で自分の部屋に帰っていった。

「士郎！ー！ご飯はまだですか？」

「あ、ああもうすぐだよ」

「~~~~~」

「

「??????」

何故かセイバーは上機嫌で居間へと行ってしまった。  
そこで、俺は気付いた。

（政宗・・・捕まっただな。）

俺は、台所に向かって料理を再開することにした。

### その夜

「政宗・・・どうしたのだ？その怪我？」

「ああ、本当はこれより軽い怪我だったんだがな」

俺は酒を飲む約束をしていた、アーチャーと屋根の裏で酒を飲んでいた。

本当は腕だけだった包帯も士郎から顔にも包帯を巻いてもらっていた。

アーチャーがおれの怪我の事を聞いてきたので説明することにした。

「実は、かくかくしかじかでな  
「・・・大変だったな」  
「だろ？」

そうして、俺は一杯酒を飲み干した。

「それで、大丈夫なのか？その怪我」  
「うーん、明日には傷は塞がってると思う」  
「そうか、なら安心だ」

アーチャーも一杯酒を飲んだ。

「それにしても、今の状態で戦闘になったら大変だな」  
「ふっ・・・そうだな」

「あっはっはっはっはっ！！（笑）」

ズドオオオオオオン！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺ら二人は無言でお猪口を置いた。

「まったく・・・無粋な野郎だな。なあアーチャー？」  
「同感だ」

俺らは怒り心頭で下に下りて言った。

セイバー視点



「くっ!!! こんな時に襲撃とは……」  
「ふっ……観念なさい? セイバー」  
「ここまでか……」

私はキャストアの襲撃により、体を魔術で拘束されていた。大河もキャストアに操られてしまって、土郎が困惑している状況だった。

「藤ねえ!!!目を覚ませ!!!」

「無駄です。土郎キャストアに操られています。キャストアを倒さないは無理です。」

「流石のセイバーもそこまで、疲弊したらこの拘束はとけないでしょう?」

「舐めるな!!!」

私は拘束を無理やり解いて、キャストアに突撃をかけた。

キャストアは大河を自分の目の前において、盾にしようとした。

「くっ……」

「隙ありよ、セイバー?」

「しまった!!!」

「セイバー!!!?」

キャストアの出した短剣が私に当たる直前、障子が吹っ飛びそれがキャストアに当たった。

「な、何者!?!」

「……政宗?アーチャー?」

そこには、眼帯を付けた男と赤い服をきた男が立っていた。

「酒宴の邪魔するのはくくだくれくだく？？」

二人は赤いオーラを出しながら近づいてきた。  
キヤスターも私も少し引きながら見ていると

「お前かキヤスター？」

「な、何よ！？」

「邪魔された酒宴のうらみ思い知れえ！！」

「な、何！？」

政宗は手に日本刀を呼び出し、キヤスターに突撃した。

キヤスターは魔術を政宗に向かって撃つが政宗は刀で魔術を切り裂きながら走ってきた。

「な、何なの。こいつ……ここは、逃げさせてもらっわ！！」

キヤスターは逃げようと魔術を使おうとするが、何処からか飛んできた矢に邪魔をされた。

「ひっ！？」

「逃がさんぞ……」

二人の鬼神はキヤスターを逃がさずに尋問を始めた……  
私は政宗のあの時の顔を思い出したくもない。

俺、何か悪い事しましたか………？（後書き）

次回はキャスター戦終了です。

ヒロインはセイバーとキャスターに予定です。

他のキャラは原作どおりにしたいと思っています。

雑種、雑種ってあまり呼ばないで……泣けてくるから(前書き)

武士道です。

更新がマイペースで本当にすみません。

雑種、雑種ってあまり呼ばないで……泣けてくるから

「……それで？反省してんの？」

「悪かったっていつてるじゃない！！早くこの縄ほどいてよ！！」

「ああん？何だその口の聞き方はあ……こちとら、楽しみにしてた酒宴を邪魔されたんだぞ？」

「ご、御免なさい」

「よし、分かればいいんだ……」

ふふ俺の今までの鬱憤をすべてぶつけた様でさっぱりしたけど、申し訳ないことしたなあ

俺も子供だよなうたかが酒宴を邪魔されたくらいで怒るなんて……そう思いながら俺は素直に謝ってきたキャスターの縄を解いた。

「アーチャー」

「む？何だ？セイバー？」

「私は政宗の本当の姿を見たような気がします……」

「奇遇だな、私もだ。それにしても、あれほど怒るとはよほど楽しみにしてたのだろう」

「……」

アーチャーとセイバーはキャスターの縄を解いている政宗を見ながら思った。

( ) (政宗をあまり怒らせないようにしよう……) ( )

「ほら、好きなところへ行け」

「あ、ありがとう」

俺はキャストを外で縄を外して見送っていた。

ああ〜さつきから何か嫌な感じがする。

俺は先程から自身のスキルの1つの探知で嫌な魔力を感じていた。しかも、それはこっちに向かってくる。

うわあ〜嫌だよ〜面倒くせえよ〜

「と、とりあえず、早く帰れ」

「??? 分かったわ。確認しておくわ、私達は同盟を組むって事でいいのよね?」

「ああ、それでいい」

キャストはそれを聞いて安心しながら帰ろうとしたが、突如降って来た剣によって体を貫かれた

「!!! あ……………が……………」

「キャストー!?!」

「どうしました!!! 政宗!!!」

「何かあったのか?」

俺の大声に反応してセイバーとアーチャーも外に出てきた。

キャストは腹から相当の血を出していた。

俺はすぐさま療養武妖を使って傷を癒した。

「まったく、雑種の分際で我が前を歩こうとするとは」

「げっ……………英雄王」

俺が闘いたくないランキングのナンバー2、ちなみに一位はバーサーカー

英雄王はキャスターと俺に向かって王の財宝ゲイト・オブ・バヒロンで攻撃をしてきた。俺はキャスターを抱えながらそれを避けた。

「ふん、先程の雑種よりは出来るようだな」

「そりゃどうも」

俺はとりあえずキャスターを玄関へと置いて英雄王と向き合った。

・・・ヤバイです。勝てる気がしません・・・

「ほう、雑種の分際で俺と闘おうというのか？」

「・・・ふっ」

「政宗！！その男は危険です！！下がってください！！」

「・・・」

うるさいよ！！はなっから真っ向から闘う気なんてゼロですから！！それとアーチャー、何だその目は！！俺がこれからやる事がわかるとでもいうのか！？

ふっ・・・ならば見るがいい！！俺の格好いい台詞をなああああ

「貴様！！王の問いに答えんとはいい度胸だな！！殺してくれる！！」

「！！」

「・・・しまった、ちょっと格好つけようと思ったら間を空けすぎた・・・」

「貴様あああああ！！先程からふざけおつてええええ！！」

「ぎゃああああああああああ！！」

「・・・馬鹿？？」

英雄王の宝具達が俺に向かって飛んできた、俺はそれを阿修羅で牽

制しながら避けていた。

畜生！！ただでさえ俺怪我人なのに、何だよこれ！！

それと、そのの二人！！可愛そうな人を見る目で俺を見るな！！  
あれ？何か目が霞む・・・はは、何でかな？

「この、ちょこまかと・・・雑種如きが！！」

「あのさくさつきから雑種、雑種っていうのやめてくれよ。あいつらには変な目で見られるしもうんざりなんだよ！！」

思わず言ってしまったこの言葉、うん分かっているよ？自分でも死亡フラグが立つって事位。

「何だと？貴様、雑種の分際で王に意見しようというのか？」

「だくから」

「ん？聞こえんぞ？雑種」

「雑種っていうのやめろって言ってんだろうがああああああ！！」  
「なっ！？ぐああああああ！！」

俺はカチンと来たので英雄王の隙を突いて百鬼宗近を呼び出し波状の斬撃を英雄王に当てた。

それを喰らった英雄王は何処かへ吹っ飛んでいってしまった。

「・・・・・・・・・・」

俺がセイバーとアーチャーを見るとセイバーは既にいなく、アーチャーは首を横に振って何処かへ行ってしまった。

一人中庭に残されて、英雄王が飛んで行った方向を見た。

「やっちゃったな・・・俺。」



死亡フラグが出来ちゃったよ～～！！  
もうこうなったら、英雄王倒すしかねえじゃん！！

「それで、どうするのだ？」

「……アーチャーか」

アーチャーが俺が中庭でしょげていると後ろから話しかけてきた。

「貴様なら倒すまではいかないまでも手傷を負わせる事位は出来た筈だが……？」

「おいおい、俺を買いかぶりすぎだぜ？」

「まさか……あいつも救うとかぬかすのではあるまいな？」

あつちや～～流石はアーチャーばれてた？

まあ、一応殺すつもりは無いんだけどな～

「まあ、聞き分けがないようなら殺すけどさ」

「そうか、ならいい」

「それより、もう寝ようぜ？こんな時間だ」

「私はこれから凜の所へ帰らなければならん」

「そうか。しつかりな」

「ふっ……貴様もな」

俺はアーチャーと別れると自分の部屋に行つて寝る事にした。

「それじゃあ……お休みなさ～い」

俺は部屋の電気を消して布団に入った。

「「ちよつと待ちなさい（待つて）！！」

「・・・・あゝ？俺はもう眠いんだ、明日にしてくれよ」

「「・・・・」

「あれ？ちよつと待つて、セイバー？それに何でキャスターも？」

何故かセイバーは俺の肩を握り締めてきた。

しかもこいつ俺の肩をみしみしくまで握ってるんですけど・・・・  
あつ、そのまま連れて行かないで、何か二人とも怖いぞ？

「「政宗・・・・話があります（あるわ）」

「ひひひひひひひひひひ！！」

グッバイ

俺

俺は眠いんだよ……邪魔しないで？後生だから……（前書き）

武士道です。

更新頑張ります。

俺は眠いんだよ・・・邪魔しないで？後生だから・・・

俺はセイバー達に引きずられて居間に連れて来られていた。

そついえば、キャスターは療養武妖かけたまま置き去りにしてたんだっけか？

「単刀直入に聞くけど、あなたのその能力は何？魔術では無さそうだけど？」

「あ、ああこれは療養武妖って能力だ。俺が危険と思った物を無くすことが出来る能力だ」

「・・・それって、凄い能力なんじゃないかしら？」

「いや、所詮この能力は騙しているだけさ」

「騙す？」

「そつ、騙すだけさ」

療養武妖は確かに俺が危険と定めた物を消す事が出来るが、俺が重傷を負ったり死んだりすると今まで療養武妖で治して来たものが全部元通りになつちまうからな

俺から言わせりゃ、こんな能力気休めにしかならねえし。

「意味が分からないわよ・・・ちゃんと説明して」

「まあ簡単な話、俺が重傷を負ったり死んだりすると直してきたものが戻りますよって話だ」

俺がそういうとキャスターが慌てた様子で話してきた。

「ちよつと待ってよ、それじゃあ私のあの傷は・・・？」

「まあ、俺がやられたら戻るわな」

「ちよつと！！それってやばいんじゃない!？」

分かってるよ・・・そんな事位。  
だから、これから治す方法を考えるんじゃないか。

「まあ、お前の傷については心配はいらないだろう」

「・・・どうしてよ?」

「それはだな・・・おい凜、どうせ聞いてたんだろ?出て来いよ?」

「・・・気付いてたのね」

凜は悔しそうに襖を開けて入ってきた。

ここだけの話、あいつ顔丸見えでした。

それにしても、アーチャーとは行き違いという事になるのかな?これは・・・

「それで、どうだ?やれるか?」

「まあ不可能ではないけれど・・・」

「よし!!それじゃあ、決定つと」

俺はキャスターと凜を連れて中庭に出た。

「それじゃあ行くぞ?」

「何時でもどうぞ?」

「凜はどうだ?」

「ええ、何時でも来て」

「よし・・・」

俺は目を閉じてキャスターの頭に手を置いてキャスターにかけていた療養武妖を解除した。

すると、キャスターの腹から血が再び出てきた。

それを見た凜はすぐさま、治療を開始してキャストアの傷をふさぐ事に成功した。

「これで安心だな」

「そうね、それじゃあ私は戻るわ」

「私も眠くなつたから寝るわね」

「ああ・・・」

俺は二人と別れ再び居間に入った。

すると、そこにはセイバーが茶を啜りながら待っていた。

「それで・・・お前は何のようだ？セイバー？」

「政宗・・・実はですね・・・」

「何だ？どうしたんだ？」

「あなたがこの前連れてきた女性が

「目が覚めたのか？」

「ええ、一時的にでしたが・・・すぐにまた眠りについてしまいました。」

ふむ・・・見た目的にあの女は強そうに見えたのだが。

まあ今度起きたときにも話をしてみるとするか・・・

それよりも、英雄王をどうにかせんと・・・

「セイバー、あの野郎のことなんだが・・・」

「それは・・・ギルガメッシュの事ですね？」

「分かってたのか」

流石はセイバーと言った所か・・・

俺は自分の茶を淹れて、セイバーの向かい側に座って話を続けた。

「実はなセイバー、俺はあいつを罠にはめようと思ってる」

「罠・・・とは？」

「簡単な事だ。俺が囮になってお前らが待ち伏せしている所へ誘導し、お前らが一気に宝具で片付けるといふ作戦だ。シンプルな作戦だろ？」

「しかし、私にも騎士としての誇りが・・・」

甘い事を・・・俺が生きてきた戦国じゃあこれ位当たり前だぞ？

よく、これで一国の王が務まったものだ。

そんなんだから、てめえの国を滅ぼす事になるんだよ。

「あのなあセイバー・・・」

「何です？」

「お前、それでも王か？」

「・・・どういう意味です？」

「言葉通りに意味だが？」

俺がそういふとセイバーは少しムツとした表情で話してきた。

「あなたは私を愚弄するのですか？」

「だってそうだろ？ これしきの判断に何を迷う必要がある？ それに、お前は十分すぎるほどその綺麗な手を血に染めた来た筈だぞ？ 今さら綺麗な事を言いつつもりか？」

「ぐ・・・」

「どうした？ もう返す言葉も無いのか？ はあ、よくお前みたいな奴が王なんてやれたな」

「黙れ！！」

セイバーはそう叫ぶと俺に聖剣を向けていた。

まったく、すぐに感傷的になる……これほど、やり易い相手はいないな。

俺は少し溜め息をついていると

「政宗……私と勝負です」

「ほう……いいぜ。俺も実際、この前のおかずの借りを返したいと思つてたんだ」

「手加減はなしですよ？」

「その言葉……後悔すんなよ？」

セイバーは茶を飲み干すとすぐに道場に向かって行つてしまった俺も茶を飲み干して台所にセイバーに分まで茶器を運んで道場へ行く事にした。

少し言い過ぎたかな……

俺は少し後悔しつつも道場へと足を運んだ。



## セイバーとの練習試合（前書き）

武士道です。

更新頑張ります。



俺はセイバーの上段からの攻撃を竹刀で受け流してバランスを崩させた。

「！！ しまった!？」

「隙やりだぞ？セイバー？」

「くっ!！」

「遅い・・・ 居合い

「うっ・・・!！」

如月

俺はそれを見逃さず居合いの体制でセイバーに一步近づいた。

それを見たセイバーはすかさず反撃をしようとするが、俺は居合いでセイバーの竹刀を弾いた。

「どうやら・・・俺の勝ちのようだな？セイバー？」

「くっ・・・」

「お前は感傷的になりすぎる・・・だから、お前の剣は止まってる様に見えるぜ」

「・・・」

「大体、お前は士郎に甘いと言うが俺から言わせりゃお前も十分過ぎるほど甘い」

「・・・」

「まあ・・・でも、俺はそうゆっの好きだぜ？」

「え・・・?」

俺も昔はお前らと一緒にだったしな・・・

馬鹿だよなあ、戦国の世を俺が統一して幸せな国家を作ろうとしたんだから・・・

まあ失敗しちゃったけどな。



「ふっ・・・あの男か？あいつはこの国の戦国時代という時代に生きた有力大名だ。お前らの言葉でいうなら地方の領主様と言った所か・・・」

「地方の領主だと！？ その程度の存在が我に傷をつけたというのか！？」

「ギルガメッシュ・・・奴を侮るな」

「何だと・・・？」

綺礼は意味深げな表情で話し始めた。

「あいつは何気に他のサーヴァントと同盟を結んでいる。確認しているだけで、セイバー、アーチャー、ライダー、キャスターこの四体だ。流石は奥州の独眼竜、考える事が早い・・・」

「ふん！いくら雑種が集まろうと我の敵ではないわ！！」

「どうか？いくらお前でもサーヴァント四体に攻撃されたらひとたまりもないのではないか？」

「・・・」

「それにこの四体に加えて独眼竜も加わるのだぞ？あやつはサーヴァントではないが、サーヴァントに匹敵する力を持っている。」

「・・・」

「この分だとおそらくバーサーカーとも同盟を組むつもりだろう」

「我に何をしろと言うのだ・・・？」

「簡単な話だ・・・ランサー」

綺礼がそう言うと青いスーツを着て赤い槍を携えた男が現れた。男は不機嫌そうに答えた。

「何だよ・・・マスター？」

「お前には独眼竜と闘ってもらおう」

「何だと？」

「おそらく奴はバーサーカーと同盟を組むために他の同盟しているサーヴァントを総動員して同盟を組もうとする筈、そして奴は離れて様子を見ている筈だ。そこを襲え」

「俺に不意打ちをしろってのか・・・」

「そうだが？」

「チツ！！ わあったよ、やってやるよ」

ランサーはそう言って何処かへ行ってしまった。  
ギルガメッシュは不安そうに言う。

「何故奴を行かせる？」

「なあに、偵察だよ。ランサーがやられても構わん、奴の実力をしれるのならば」

「・・・」

「今は奴を泳がせておけ・・・闘うのはその後だ」

「よかるう・・・待ってやる」

その時の衛宮邸

「あっはっはっはっはっ！」

「セ、セイバー!?!」

「どうしたんれす? 政宗?」

その後、俺たちは再び居間によって俺が部屋から持ってきた酒を飲んでいた。

セイバーは俺が薦めたお猪口一杯の日本酒を飲んだ瞬間・・・酔った。

見れば分かるがマジで酔っている。

「政宗え〜〜〜?」

「なっ何でしようか?」

「もっと飲みましょう」

「え・・・でもこれは俺がとって置いた最後の酒」

俺はこの前アーチャに貰った高価な日本酒を抱えていった。しかし、酔拳状態のセイバーは聞く耳を持たない。

「いいじゃないれすかあゝ、少し位……」

「駄目だつて……これはマジで駄目だつて」

「いいから飲みましょう」

「ああ……」

その後の俺は酒を無理矢理口につ込まれ、吐くほど飲まされた。一方セイバーは

「グーグー」

「この野郎……気持ちよさそうに寝やがって、これでも喰らえ！」

俺は懐にあつた座布団をセイバーに投げたがセイバーは本当に寝ているのか？というレベルの反応で座布団を投げ返してきた。それを喰らつた俺は思い切り壁に激突した。

「こいつ……寝ている時のほうが強いんじゃないかね？」

「ゴハア！！」

俺はそのまま気を失ってしまった……



一日酔いつて辛いよね……分かります。(前書き)

武士道です。

更新頑張ります。

「二日酔いって辛いよね……分かります。」

俺が目覚ますと士郎が朝飯を作っていた。

士郎は俺が目覚ました事に気がついたのか、話しかけてきた。

「目が覚めたのか？ 政宗」

「ああ、まったく酷い目に遭った」

「ハハハ……そうみたいだな」

士郎は散乱しているテーブルと俺の隣で泥酔しているセイバーを見ながら苦笑した。

さてと……今日はバーサーカーと手を組む事にするかな？

俺はそう考えながら士郎から新聞を借り、トイレに向かった。

「とりあえず、ギルガメツシユは保留だな……」

俺は新聞を見ながらブツブツと呟いていた。

他の人から見られていたら危ない人と勘違いされるだろう。

言峰もギルガメツシユも大人しくしてくれれば、助かるんだけど……

ああゆう、危ない考え方が問題なんだよな

言峰については危ない思想ならば……消去という事で決定かな？  
まあ、説得出来たら説得するでしょう。

「ふう……」

俺は新聞をたたんで、トイレから出て居間に向かった。

「おお・・・今日も美味そうな料理だなあ？ 士郎」

「ああ、ありがとう政宗。それより、セイバーは・・・」  
「ん？」

俺がセイバーを見るとまだ寝ていた。  
仕方ないので起こす事にした。

「おいセイバー」

「うん・・・」

「仕方ない・・・二日酔いだろうが、許せ！！セイバー！！」

俺はセイバーの服を掴み、そのまま庭の池へとブン投げた。

ドポオオオン！！という音と共にセイバーは慌てながら水から出てきた。

「はあ・・・はあ・・・政宗？ もう少し優しい起こし方は無いのでしょうか？」

「いやあ、お前が中々起きないもんだからこの方法ならと思ってだな・・・」

「言い訳はそれで終わりですか・・・？ ウプ・・・」

「おいおい、無茶すんな。」

「うう・・・申し訳ありません。 政宗」

俺の読みどおりセイバーは二日酔いだった。

俺はセイバーを担いでトイレに送った後、居間で飯を食べていた。

「さて・・・土郎」

「ん？何だ政宗？」

俺が箸を置いて、土郎に話しかけると土郎は普通に返事をしてきた。

「・・・」

「おい、どうしたんだよ？政宗？」

「・・・こいつ、危機感という物は無いのだろうか？」

この前のあの慢心野郎を見ても何も感じていないというのだろうか？  
あいつは確かに傲慢で隙だらけだが、あいつの力は確実に危険だ。

「おい、土郎。この前の金ピカ野郎の事だが・・・」

「は？金ピカ？何を言ってるんだ？政宗」

「・・・」

すまん、危機感以前の問題だった。こいつ、そもそもあの金ピカの事を見ていなかったのか。

「はぁ・・・まずそこからか。」

「そこからって・・・何処からだ？」

「まず、俺の話を聞け」

「あ、ああ分かった」

俺の土郎に対する金ピカについての説明を始めた。



政宗と土郎（前書き）

こんにちわ、武士道です。  
更新頑張ります。

## 政宗と士郎

「まあ、簡単な話。実は昨日、サーヴァントが現れたんだ」  
「何だつて!？」

ただいま俺は士郎に向かって、あの傲慢野郎の説明をしていた。  
それにしても、こいつ俺の話分かってんのか？

「そのサーヴァントにキャスターがやられ、俺が応戦してあいつを  
追いつ返したつてわけ」

「へ」

「お前よお・・・俺の話聞いてた？」

「いや、聞いているけど・・・」

こいつ・・・あいつの危険性がわかんねえのか？

あいつ、傲慢で馬鹿だけど実力は本物だぞ？

「・・・とにかく、あいつを危険と判断した俺はあいつに対して包  
囲網を敷く事にした」

「包围網？」

「ああ、皆で結託して敵をやっつけましょつてとこだな。ちなみ  
にキャスターとライダー、アーチャーは納得している。」

「なるほど・・・」

士郎は納得したような表情で頷く。

さてと、問題はバーサーカーだな・・・どうするか  
そう思っていた俺は、士郎の顔が見えて閃いた。

「ど、どうしたんだよ？政宗？」

「ナイスだ士郎。お前のお陰でいい考えが浮かんだ」  
「?????」

俺は士郎に親指を立ててグーサインをして、部屋を後にした。

士郎視点

「一体何だったんだ・・・？」

俺は部屋から上機嫌で出て行った政宗を見ながらそう思っていた。

「・・・・・・・・」

俺は外を見ながら、政宗が俺に向かって言ったあの言葉を思い出していた。

『人には出来る事と出来ない事がある。それを見極めない限りお前は本当の意味で人を救えない』

・・・・・・・・本当の意味で・・・か。

そうだ、一度政宗にその事について聞いてみよう。

俺はそう思って、政宗の部屋へと向かった。

「・・・・・・・・」



俺は自室で今後の事について考えていた。  
とりあえず、英雄王包囲網については依存は無い。

問題は綺礼の事だ・・・一体何を考えている？

あいつならば今の状況の悪さは理解している筈だ、あいつの陣営は英雄王とランサーの二人だけ

バーサーカーを含めた、俺らが総攻撃を加えればすぐに片がつくだろう。

なのに・・・何故動かない。

「駄目だ・・・どうも、今日は頭が冴えん。一休みするでしょう」

そう思って、俺はライダー戦の時に買った歴史の本を読み始めた。  
何故かって？ 俺があれだけ頑張って歴史を変えようとしたんだ。  
少し位、歴史が変わっていてもいいだろ？まあ、結果は見えるけどな。

「・・・やっぱりか。結局、何も変わっちゃいない・・・か」

俺は膝に肘をついて顔を覆った。

歯を噛み締めながら、悔しい気持ちを殺した。

「あれだけ・・・頑張ったのに、どうしてだ？ あれだけのたくさんの部下や関係のない民の命を散らせて置きながら・・・何をやってるんだ？俺は・・・」

俺は少し目に涙を浮かばせながら、昔の事を思い出していた。  
すると、戸をコンコンとたたたく音が聞こえた。

「・・・どつぞどつぞ」

入ってきたのは士郎だった。……一体何しに来たんだ？  
まあ、いいか。俺も頼みたい事があつたし……

「それで、どうしたんだ？士郎」

「ああ、実は政宗に聞きたいことがあつて……」

「聞きたい事……？」

「なあ、本当の意味で人を助けるってどういう事なんだ？」

「本当の意味……ねえ」

俺は顎を手でさすりながら考えた。

戦国の世に生きた俺にそれを聞くか……只の人殺しの俺に。

「そうだなあ、例えば士郎は目の前に死にかけている人間がいる。

そいつを見てどうする？」

「もちろん。助けるさ！！」

「ほう……それじゃあ、お前はそいつを治療出来ると言う事なのか？」

「それは……」

「俺が言いたいのはそういうことだよ……」

ちなみに今の話は俺の実体験の話だ。

「……」

「いいか士郎。どんなに人を救いたくても救う方法が分からなかつたら意味が無いんだ」

「……」

「俺から言わせりゃ、医者の方がよっぽど正義の味方に見えるぜ？」

「でも……」

士郎はまだ納得していない様子だった……

まったく、世話の焼ける主人公だな。

「それじゃあ、お前はどいう風に人を救いたいんだ？」

「それは……」

「もしやと思うが……セイバーのようにとか言わないよな？」

「えっ……」

やっぱりか……予想通りすぎて笑えてくるな。

「あのなあ士郎……英雄は英雄なりに辛い事をいくつも経験しているんだぞ？」

「そんな事は知ってるよ」

「それじゃあ、お前は自分の野望のために実の父親を殺せと命じる事が出来るか？」

「え……？」

俺は真面目な顔で士郎に問いかけた。

「おい、政宗。それってどいう」

「すまん。今の話は忘れてくれ。それより、士郎、凜や桜ちゃん、キャスターの組も居間に呼んで置いてくれるか？話があるんだ。セイバーには俺から伝えておく。」

「わ、分かった」

俺は頭を掻きながら部屋を出て、セイバーを呼びに言った。

セイバーを説得せよ！！（前書き）

武士道です。

更新頑張ります。

セイバーを説得せよ!!

「セイバー？セイバー？……まったく、何処にいるんだ？」

俺がこれからの事を説明する為にセイバーを探している所だ……それより、あいつ何処行つた？

「政宗……」

「おつ！そつちか？ まったく、何してんだ……セイバー？」

俺がセイバーの声を頼りに着いた場所はトイレ……もしかして

「もしかして……まだ吐いてんのか？」

「はい……」

「仕方ねえなあ……」

俺はセイバーの背中をさすってラクにさせようとした。

そして……

「ふう……ありがとう政宗。あなたのお陰で随分楽になった」

「そうかい、そりゃよかった。それで、これから話があるんだが……来れるか？」

「勿論です」

「そうかあ？無茶しなくていいんだぞ？」

「くどいですよ……政宗」

「はいはい、それじゃ行くとしますか」

そうして、俺らは居間へと向かった。

俺らが居間につくと既に全員がきていた。

「おっ？もう来てんのか？早いな」

「はぁ・・・君が呼んだんだろう？政宗」

「おお、アーチャー！久しぶりだな」

「昨日会ったような気がするのは私だけかな・・・？」

「そうだったか？まあいい。それじゃ、始めるか」

俺はそう言つて、全員に俺の考えを発表した。

案外、俺の考えにほとんどの奴が賛成してくれた。

しかし、一人だけ賛成しなかった奴がいた・・・勿論、セイバーである。

「私は反対ですよ？政宗」

「セイバー・・・政宗の提案は悪くないと俺は思うぞ？」

「士郎は黙っていてください」

「すまん・・・」

おい・・・士郎はお前のマスターだろうが。士郎が可哀想だろ！！と俺は言いたがったがセイバーの迫力を見るに本気で反対のようらしい。

「何故だ？」

「政宗・・・私は騎士です。あなたの言う事は正しい・・・だけど、私は騎士らしく正面から戦いたい」

仕方ないな・・・こいつは言ったら聞かないタイプだし。

「分かった・・・お前は俺と来い」

「え？」

「俺と一緒に囃役になれと言っているんだ」

「しかし」

「いいじゃねえか。お前が自分に実力があると思うなら、そこであの野郎を倒せばいい……だろ？」

「……確かにそうですね」

「それじゃ、お前が倒せないと俺が判断したら作戦を実行するからな？」

「はい、それで構いません」

「よし、決まりだ」

俺は皆に解散と言って、屋根に向かった。

「アーチャー？どうしたの？」

「いや……何でもない。凜、私は屋根で見張りをするとしよう。」

「ええ、頼むわ」

そして、アーチャーは霊体化して行ってしまった。

セイバー視点

「政宗……」

何故でしょう……今日の政宗はいつもの元気が無いように見えましたが。

「どうした？セイバー？」

「いえ、何でもありません。士郎」

政宗は・・・一体どんな事を生前したのでしょう？気になりますね・・・  
政宗に聞いて見ましようか・・・  
私はそう思いながら政宗を探しに行った。

「・・・・・・・・」

俺は屋根で目を瞑っていた・・・そして、戦国の風景を思い出していた。

『政宗様あー!!』

『何事だ?』

『それが・・・輝宗様が』

『何!?親父が二本松義継に攫われただと!?』

『はっ!!!現在、逃亡中との事!!!』

『馬鹿親父・・・急ぎ馬を用意せよ!!!追っぞ!!!』

『はっ!!!』

「政宗!!!」

「うお!?何だ、セイバーか・・・どうした?」

俺が昔を思い出しているときいきなり声をかけられたので驚いてしまった。

セイバーは変な顔をしながら俺を見ていた・・・何だ?



「政宗・・・寝ていたのですか？」

「あ、ああ・・・昔の夢を見ていたようだ」

「昔・・・ですか」

「ん？どうした？」

セイバーは少し女の子らしい顔をしていた・・・一体どうしたと  
いうのだろうか？

「政宗は一体どういふことをした人なのですか？」

「・・・それを聞いてどうする？」

「どうもませんが・・・？」

「・・・そうかよ」

俺は少しムスツとしながら、昔話を始めた・・・

「俺は・・・実の父親を撃ち殺した男だ。」

「え・・・？」

「それに・・・敵の降伏を許さずに皆殺しにした事もあったな。引  
くだろ？」

「そんな事は・・・」

「いや、いいんだ。自分でも分かってる。」

俺は顔を手で覆いながら話を続けた。

「何で・・・こうなっちまんたんだろうなあ。分かってた・・・ハズ  
なのになあ」

「分かってた？」

「あれ？言つてなかったつけ？俺が・・・いや、やっぱやめとく」

「ちよ、政宗！？気になるではありませんか!？」

「すまないな、この話はまた今度だ!!」

俺は屋根から跳び降りて、自分の部屋に向かった。

## 最後のピース（前書き）

武士道です。

更新頑張ります

## 最後のピース

トサ

俺の部屋に置いてある本の山が崩れた音を俺は静かに聞いていた。

「んっ……どうすっかなあ」

俺はギルガメッシュを倒す最後のピースのための作戦を考えていた。

「とりあえず、アーチャーと相談してみるか……」

俺はアーチャーと相談する為に凜に居場所を聞きに行った。

「は？アーチャー？ あいつならさつき、屋根で見張りをするって  
いってたわよ？」

「見張りか……分かった。ありがとな」

俺はアーチャーを追って再び屋根へと向かった。

セイバー視点

「気にかかりますね……政宗の最後のあの言葉」

私は政宗が行った後も屋根で政宗の最後のあの言葉に考えていた。

『あれ？言っでなかつたっけ？俺が・・・いや、やっぱちめとく』

「・・・・・・・・」

一体何を隠しているのでしょうか・・・？

それにしても、政宗の過去・・・もう少し聞きたかったです。

「アーチャー？ あれ〜いねえのか？」

「政宗？どうしたのだ？」

アーチャーを探して、俺が声を出して探していると急にアーチャーが出てきた。

「ああ、実はアーチャー相談事があるんだ」

「ふむ・・・君が相談事とは珍しいな・・・まあいい、聞くとしよう」

「ああ、実は」

「政宗？一体何をしているのですか？」

何故か急にセイバーが現れた・・・つか、まだいたのか？

「お前・・・まだいたの？」

「え、ええ少し考え事があった・・・それより、何を話そうとしてたのですか？」

「実はだな・・・バーサーカーを仲間にする方法を考えてたんだ」

「バーサーカーを？」

「政宗・・・それは、難しいと思うぞ?」

「・・・分かってるよ。正直、今考えている作戦も100%成功する自信はないしな・・・」

しかし、決して確立が零というワケではない。

「分かってる、だが希望はある」

「希望?」

「それは」

「それは?」

「・・・士郎を使う」

「はあ!?!」

## 最後のピース（後書き）

今回は少ない量ですいません。  
次回からは何時もどおりにします。

英雄王包囲網を結成せよ！！（前書き）

武士道です。

更新遅れてすいません。



英雄王包囲網を結成せよ！！

「政宗・・・何を言っているのです？ 士郎はるくに魔術が使えないのですよ？」

「それは分かってる。だが、士郎にやつてもらっただけじゃないんだ」

「ほう・・・それはどんな理由かね？」

「・・・この所、あのクソ神父の動きが無い」

俺がそう言つと二人は気付いたのか顔をしかめた。

「成る程な・・・確かに、あの神父が動きを見せないわけが無い」

「そうですね・・・私達の戦力はバーサーカー以外のすべてのサーヴァントが集まっているのに何の動きも見せないのは妙ですね」

「だろ？」

二人は頷くと俺は話の続きを始めた。

「そこでだ・・・俺は交渉をせずお前らの後ろから見ていることにするよ」

「何故です？」

「大方、あの神父の事だ・・・おそらく、ランサー辺りに俺を暗殺させようとするだろうからな」

「確かにな・・・あの神父ならやりかねないか」

うん。やっぱり、アーチャーは物分りがよくて助かる

「しかし・・・何故士郎なのです？ 別に凜でもいいと思いますが・・・」

「ん？ そりゃあ・・・」

「それは？」

「なんとなくだ」

「・・・」

おい、何だよセイバーその目は・・・

確かに勘に頼ったのは悪かったが、士郎ならイリアと何とか話を付けてくれると思うしな。

「まあ、いいでしょう。私や、アーチャー達が居ますしね」

「ああそうだ。キャスターは連れて行かないからな？」

「何故です？」

「あいつの宝具が必要なんだよ」

その後、三十分間話しようやく作戦が決まった。

翌日

「これでよしと・・・」

俺が準備をして外に出ると既に全員が集まっていた。

そこに居たのは、バーサーカー、アサシン以外のサーヴァントと士郎、凜達……

他のマスター？ 危なっかしくて連れて来れないだろ？

「政宗、準備は出来たのか？」

「ああ、士郎。この作戦はお前にかかっていると断言していい、頑張ってくれ」

「分かった」

「それと、キヤスター。作戦は頭に入っているか？」

「ええ」

「よし、それじゃあ行くか？」

俺らはイリヤスフィールが待つ、アインツベルン城へと向かった。

「あれ？士郎じゃない……何か御用なの？ それとも死にに来たのかしら？」

「待ってくれイリヤ！！ 俺達は戦いに来たわけじゃない！！」

「戦いに来たわけじゃない？ それじゃあ、どんな用事で来たと言うのかしら？」

「俺達は交渉に来たんだ！！ イリヤ、俺達と同盟を結ばないか！！？」

士郎の説得開始を俺は離れた木の上から、双眼鏡で確認していた。そして、後ろを向いてキヤスターに確認をとる。

「キャスト、予定通り俺の200m後ろで待機してくれ」  
「分かったわ」

キャストは一瞬でその場から消えてしまった。

俺は双眼鏡で再び、土郎達を観察する。

どうやら、思ったよりてこずっている様だな……まあ、凜もいるし大丈夫だろ。

「さてと……俺の予想通りに来るかな？」

俺は綺礼が、俺の予想通りに動いてくれるのを願いつつ、土郎の交渉の様子を伺っていた。

奇襲（前書き）

武士道です。  
更新頑張ります。

## 奇襲

おいおい・・・土郎ミスるんじゃないんだろうな？

俺は双眼鏡を覗きながらそう思っていた。

凜とアーチャーがナイスなフォロウをしてくれているようだが、土郎の奴は普通に話しているつもりでイリヤを怒らせているようだ。

・・・どうする？俺が行くか？

いや、もしかしたら言峰の奴が奇襲をかけてくるかもしれないしな・・・

ここは様子見というこつ。

「どれ・・・少しばかり集中してみますかね」

俺は集中して探知のスキルを使った。

集中してこのスキルを使えば、半径300m以内なら例え気配遮断のスキルを持っていてもすぐに捉えることが出来る。

集中してみると、森の奥から誰かが来たようだ。大方、ランサーの奴だろう・・・

「政宗、敵が来たわ」

「ああ、そのようだな。予定通りにキャスターは俺から距離をとっててくれ」

「分かったわ」

キャスターが移動したのを確認して俺はワザと隙だらけのフリをした。

もちろん、敵を生け捕りにする為だが・・・

「さてと、釣れる魚は雑魚かそれとも・・・大物かな？」

獲物がかかるのを俺はゆっくり待つことにした。

ランサー視点

「ちっ・・・あの野郎」

よりもよって、俺の一番嫌いな奇襲をやらせるとはよ・・・

しかも相手は、この前の眼帯の男。

あいつにはバゼットを助けてもらった借りもある、こんな汚い方法で殺したくは無い。

「・・・こそ」

俺が愚痴りながら進んでいくと、標的のあの男がいた。

しかし、隙だらけもいい所である。

何をしているかというと、寝ているのだ・・・いびきを掻きながら。

「こんな任務時に限って都合のいい野郎だ・・・」

俺は少し悲しい顔をしながら、槍を出しそのまま突きにしようとした。

しかし、その突きは男を貫通しなかった。

「なっ!?!」

「ふむ・・・やっぱり、ランサーか」

「てめえ、寝たふりをしてやがったのか」

「普通はあんな所で寝る奴はいないと思うがな・・・」

「確かによく考えたらそうだな」

俺は再び槍を構えてニヤリと笑った。

「だが、これでいい。これで正々堂々の戦いが出来るってもんだ・・・行くぜ!!!」

俺は槍を構え、男に突撃した・・・

「おいおい・・・交渉がしたかったんだがな」

「あ?交渉だ?」

「ま、いいか。闘ってからでも・・・お前もその方がいいだろう?」

「へっ!分かってんじゃねえか!!!」

「・・・この戦闘狂が」

俺は百鬼宗近を構えてランサーを迎え撃った。

ランサーが俺の心臓目掛けて槍を突いて来るが、俺はそれを刀で何とか防いでいた。

「くっ・・・流石に速いな」



「どうした！その程度かよ！！」  
「なら……」

俺は居合いの構えをとってランサーを俺の射程範囲まで待った。

「は！何だそりゃあ！！」

ランサーは構わず俺に槍兵得意の突撃を繰り出してきた。  
俺はそれを居合いで迎え撃った。

「居合い

如月！！」

「うお！？」

俺の居合いをランサーは間一髪の所でかわした。  
正直かわされたのはシヨックだったが、そんな事をしている場合じゃない。

「ランサー、どうだ？俺達の仲間にならないか？」

「ああ？お前らの仲間だあ？」

ランサーは槍を消して、俺の事を少し見ると頭を掻きながら言った。

「まあ、正直今のマスターにはうんざりしてんだ。しかし、どうやって俺を仲間にするんだ？」

「方法はあるさ……キヤスター出てきてくれ」

「呼んだかしら？」

「お前の宝具でランサーを開放してやってくれ」

「ああ、それで私なのね……」

「話が早くて助かる」

キャスターが懐から変な形の短剣を出すと、ランサーがビックリしていた。

「おいおい・・・何する気だよ？」

「安心しろランサー、これはキャスターの宝具『破戒すべき全ての<sup>ルブレイカー</sup>符と言つてあらゆる魔術の生成物を初期化する事が出来る宝具だ。

ここまで、言えば分かるよな？」

「ああ、成る程な。しかし、俺の新しいマスターは誰にするんだ？」

「ん？そりゃあ、もちろんキャ

「私は嫌よ」

「何でやねん！！」

思わず突っ込んでしまった俺。

ちよつと、待てよ・・・じゃあ、誰がやるんだよ

「あなたがやればいいじゃない」

「は？俺が？そんな事可能なのか？」

「ええ、一度私が宝具を使ってあなたがランサーに召喚の呪文を唱えればいいわ」

「え、でも俺召喚の呪文なんて知らないし、魔力は持つのか？」

「召喚の呪文なら私が教えてあげる、魔力は・・・まあ頑張つて」

「ええ・・・」

「ま、よろしく頼むぜ？新マスター？」

「まだなつてねえよ・・・それと、俺の名前は政宗だ」

その後、俺はランサーのマスターになった。

どうせやるなら、アサシンのマスターの方がよかったのだが・・・  
まあいいでしょう

しかし、魔力が何とか持ってよかった・・・

さて、士郎の様子が気になるし行って見るか・・・

俺達は士郎たちのいる城へと向かった。

英雄王包囲網結成！！（前書き）

武士道です。

更新遅くてすみません。

## 英雄王包囲網結成！！

俺がランサー達と一緒に城に着くと、士郎とイリヤが話していた。もしかして・・・成功したのか？

「政宗！どうやら、そっちも終わったようだな？」

「あ、ああ。それより、説得の方はどうだ？」

「ああ、途中から遠坂やアーチャーが協力してくれたお陰で何とか成功したよ」

「そうか」

俺は士郎の話を聞き終えると、イリヤの方へと向かった。

イリヤは少し警戒してる様子だった。

・・・困ったな

「・・・俺の事覚えてるか？」

「前にバーサーカーを二回も殺したお兄ちゃんでしょ？覚えてるわよ」

「そりゃ良かった。ところで、同盟は組んでくれるのかな？」

「ええ。その代わり私も士郎の家に住まわせてもらうけどね」

「イエス！！」

嬉しさの余りガッツポーズをってしまった俺。

周りの視線が痛い気がしない。

・・・しかし、綺礼の奴どうするつもりだ？

流石にギルガメッシュと云えどこの勢力に勝てるとは思えないし・・・

ランサーももう使えない、残る駒はギルガメッシュのみ。

もしくは自分自身が闘うとでも言うのか？

……馬鹿馬鹿しい、サーヴァントに只の人間が勝てる訳が無い。

「政宗？」

「うお！？ セイバーか……」

「大丈夫ですか？ 少し顔色が優れないようですが……」

「いや大丈夫だ。少し考えすぎただけさ……」

「そうですか？ それならよいのですが……」

セイバーはそう言って士郎達の所へ行ってしまった。

俺が少し溜め息を吐きながら腰を降ろしているとランサーが話しかけてきた。

「おい政宗」

「今度はランサーか？ どうした？」

「お前……綺礼の事で悩んでんじゃねえだろうな？」

「……っ！！」

「やっぱりか……」

何故こいつは勘がこんなに良いのだろう……？

あれか？ 野生だからか？

あつ、犬か？ 犬が関係してんのか？

「あんまり考えすぎはよくねえぜ？ 実際、俺もあいつが何を考え

てんのかは分かんねえ。

だが、1つだけ分かる事がある……」

「……それは？」

「あいつはお前に興味を持ってるとして事だ」

「何だと？」

もしや、イレギュラーである俺に気付いたとでも言うのか？  
いや・・・おそらくは俺の考え方に興味があるのだろう。  
しかし綺礼よ、俺にお前を満足させる程の考えは無いぞ？

「政宗・・・大丈夫か？ あんまり考えすぎは良くねえぞ？」

「ありがとよランサー。俺はもう大丈夫だ・・・それじゃ今日はこれで解散！」

俺がそう言つとキャスターとライダーは自分達のマスターの家に、  
しかしその他のサーヴァントは全て士郎の家に集まった。

士郎邸にて

中々・・・カオスだな。

俺は今まで広がった茶の間を思い出しながら言った。

俺の眼前には四体のサーヴァントとそのマスター達が机を囲んでい  
る光景があった。

そういえば、七騎のサーヴァントの内の四騎もあつまってんだもん  
な

こりゃ、飯も大変になるぞ

ふいに庭を俺が眺めると、今まで綺麗な月が見えていたのに・・・  
そこには巨人が立っていた。

仕方ない・・・いっちょ言ってやるか。

俺はバーサーカーに声をかけようとした。

「・・・」

「……………」

俺は無言でバーサーカーから目を逸らした。

無理……ぜってえ無理！！ 目を合わせただけで殺されそうだ！！  
体に穴開きそうだもん！！ あいつ目からレーザービームでも出そ  
うとしてんじゃねえのか！？

「政宗？」

「ん？何だよセイバー」

「早く取らないとご飯が無くなってしまいますよ？」

「…………え？」

俺が食卓を見ると、ランサーとセイバーが既に戦を始めていた。

しまったああああああああああ！！

「やばい！！ 俺の飯が！！」

「あつ！？政宗、それ俺のおかずだぞ！」

「やかましい！ 大体お前、今は俺のサーヴァントだろ！？そこは  
マスターに譲るもんじゃねえのか！？」

「はっ！ 飯にマスターもサーヴァントも関係ないね！」

「てめっ…………ん？」

すると、俺が箸で掴んでいた箸の餃子が無くなっていた…………

「な、何だと……………」

俺が周りを見回して犯人を捜すと、何故か俺の隣の奴がモゴモゴい  
つていた。



「セイバー」

「な、なんふえす？（です？）」

「何食つてんだ？」

セイバーは口にあつた物を飲み込むと満足そうに呟いた。

「餃子ですが？」

「確か、餃子はランサーが持っていたので最後だったよな？」

「そうですね」

「お前・・・とつたな？」

「人の事を言えないのでは？」

「ぐ・・・この腹ペコキング」

「・・・」

「痛い！！」

俺が悪口を言った瞬間、セイバーの鉄拳が飛んで来た。

それは見事に俺のボディに当たった。

「み、鳩尾・・・」

不機嫌そうに顔を振ったセイバー・・・俺を無視して飯にがつつくランサー。

何か今日・・・ついてないな。

そして、俺の分のおかずはランサーとセイバーの胃の中へと消えた・・・

その後、俺は自室で就寝した。

ランサー？ ああ、あいつならばゼットさんの所へ行つたよ。

やっぱり、心配何だろうな・・・何せ、元マスターでしょ？確か  
さて、それじゃ寝るとしますか・・・

そして、俺は昔の夢を見た。

英雄王包囲網結成！！（後書き）

ご飯の時間帯は夜です。

## 小手森城の戦い（前書き）

みなさん、あけましておめでとございます！

さて、更新がかなり遅くなってしまい申し訳ありませんでした。

今日から、他の作品共々書き始めますのでよろしくお願いします。

## 小手森城の戦い

懐かしい風景だ。

俺は、眼前に広がる城を見つめながらそう思った。

あの城は、小手森城……

この土地の領主だった大内定綱おおうちさだつなの城だ。

と言う事はこれは……あの日の事か。

『よし、かかれ!』

(あれは……俺か?)

そこには、過去の俺が伊達軍を率いて闘っているのが見えた。

あの日の俺は、自分をからかった大内定綱に対しての恨みに囚われていた。

故に俺は戦争を起こしたのだ……

俺は過去を反省しながら戦を拝見していた。

『押せ! 押すのだ!』

(我ながら……凄い気迫だな)

過去の俺の号令と共に、伊達の兵士達の士気が上がるのが分かった。大内家の兵士達は今まで、援軍の兵と自分達とで伊達軍を挟み撃ちにしていたので打って出てきていた。

過去の俺は城から出てきたのを見ると横に配置していた伊達の鉄砲隊に号令をかけた。

すると、伊達鉄砲隊が一斉射撃を始め、城から出てきた大内家の兵

を蜂の巣にしていた。

城の入り口には大内家の兵の死体が幾つもあった。  
過去の俺はそれを踏みながら、城内へと侵入を開始した。

(ああ・・・また、あれを見るのか・・・)

俺は心の中でそう思った。

『殺せ、城内の敵、すべて殺せ!!』

伊達の兵が大内の兵を殺しているのが見えた。

『一人も許すな、皆殺しだ、なで斬りにしろ!!』

この俺の所業は、人として許されなかった事なのだろう・・・  
自分でも分かってたさ、それ位・・・  
しかし、俺はこうするしかなかった。

当時、俺は年齢からすると19歳頃だった。

それ故に周りの大名達からも若造として侮られていた。  
だから、この鬼畜とも呼べる諸行をやったのけた。  
自分に背くところなるぞという意思表示だった。

この俺の所業で犠牲になった人たちは、老若男女あわせて804人。  
俺の目の前で首を刎ねた。

その刎ねられた首を見ながら、俺は何度も何度も謝った・・・

すまない、本当にすまない・・・と。

結果、戦には大勝利を得、さらに他の大名家にも影響を与える事が出来た。

しかし、その後に来る悲劇もあつたが・・・

『助けてくれ・・・』

『な、何だ！？』

いつの間にか、俺は小手森城の中に立っていた。すると、声が聞こえた。

『なぜ・・・我らを殺した』

『何で私たちまで殺されなきゃいけないの！！』

『まだ死にたくないよ！ お母ちゃん！』

『やめろ・・・やめてくれ！！』

俺は頭を抱えながら言った。

もうたくさんだ！ あの日の事を思い出すのは・・・  
声は段々と大きくなってくる、俺は必死に耳を塞ぐが効果は無かつた。

『すまなかつた・・・本当に、すまなかつた』

必死に俺は謝った。心の奥底から・・・

すると、別の声が聞こえ始めた。  
俺を呼ぶ声が……

『政宗……』

『もう……やめてくれ』

『政宗……』

「『黙れ!』!」

俺が目を覚ますと……隣にはセイバーがいた。

「セイバーか……すまない。叫んだりして」

「いえ、何か悪い夢でも見たのですか？」

「ああ……とっても悪い夢だ」

俺は知らないうちに持っていた、自分に関する書物を机の上に置いた。

「それで……何か用か？」

「用って……もう朝ですよ?」

「そうか、もう朝か……」

俺は窓の隙間から青空を見ると、自分の汗びっちょりの体に気付い



た。

「すまん、セイバー。俺は先に風呂に入る事にするよ」

「ご飯はどつするのです?」

「風呂のあとだ」

「そうですか……。分かりました」

セイバーはそう言って、土郎達の待つ茶の間へと向かった。

「何で……。今頃あんな夢なんか見たんだろうな」

俺は外に出て無駄に快晴の青空を見ながら言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6963v/>

---

戦国のセイバー

2012年1月11日01時57分発行